第４章　観　光

第１節　支笏湖

第１項　国立公園支笏湖

国立公園指定と公園計画

支笏洞爺国立公園指定　日本で国立公園の考え方が生まれたのは明治末期で、内務省は大正９（１９２０）年の「史跡名勝天然記念物法」の施行を受けて、全国から16ヵ所の候補地を発表している。道内では阿寒、登別、大沼が候補地となったが支笏湖や洞爺湖は含まれなかった。このため千歳村では13年６月、国に「千歳村一村を国立公園に」という請願を行っている。さらに同年、文化２（１８０５）年に「支笏（シコツ）が『死骨』に通じて不吉と『千歳』に改称」した故事から「支笏湖」を「千歳湖」に改称することを求める地名改正上申書も出したが採択はされなかった。大正12年以降、支笏湖や洞爺湖、定山渓などを対象とした国立公園設置の請願、建議が帝国議会に何度も出されているがいずれも見送られている。

昭和９（１９３４）年３月に瀬戸内海、雲仙、霧島、同年12月に阿寒、大雪山、日光、中部山岳、阿蘇が国立公園に指定されている。このため千歳村では11年10月の第34回陸軍特別大演習を機会に多くの人たちが支笏湖を訪れたことから、同年11月16日に「道立公園」への指定を陳情したが、これも実現しなかった。

戦後、運動が再び盛り上がったのは21年、定山渓温泉がある豊平町が千歳、広島、手稲、恵庭、幌別、洞爺、虻田、京極、留寿都、喜茂別、豊浦の各町村に呼びかけ「道南国立公園指定促進期成会」を発足させた。『市史』によると、設立総会の席上「道南国立公園では適当でないからと、満場一致で『北海道国立公園』」として衆議院に請願書を提出。これが認められ、当時所管していた厚生省の調査が国鉄胆振線沿線と洞爺湖で行われた。

国立公園の名称については、『市史』によると、一任された厚生省が「洞爺」としたが、その後同省から「支笏洞爺」にしてはどうかとの問い合わせが期成会にあり再び名称議論となったが、当時の山崎友吉千歳町長が「どうです支笏洞爺にしては」と発言して決定したという。

指定運動の背景には、自然保護というより国立公園による国際観光、外貨獲得に期待がかけられたことがあった。当時日本を占領していた連合国もこの方針に好意的で連合国軍最高司令官総司令部（ＧＨＱ）の調査も行われている。『支笏洞爺国立公園指定50周年記念誌』によると、23年６月に米国内務省国立公園局から派遣されたチャールス・リッチーが各地の国立公園や候補地を視察して国立公園行政の基本指針となる「リッチー覚書」を日本政府に勧告した。その中で支笏洞爺について「日本の国立公園候補地の中で恐らく最も重要なもの」として、「次の国立公園に指定すること」と全国でただ１ヵ所だけを明記している。ただし、「指定に当たっては洞爺湖および定山渓地域の私有地および開拓地は、国立公園としてはあまりにも産業化しているため、これを除外し、洞爺湖は望ましい二、三の湖岸地域と島を編入すべきである」と厳しい注文をつけている。一方、支笏湖についての評価は高く「湖周辺を広範囲に公園区域に」としている。

23年12月には国立公園指定が内定し、正式な指定はＧＨＱの許可を待って行われた。24年５月８日付の『北海道新聞』には「厚生省では支笏洞爺地区の国立公園指定について総司令部に上申中であったが７日総司令部から正式に許可する旨通知があった」と載っている。５月16日付の厚生省告示第84号で「支笏洞爺国立公園」が指定告示され、国内14番目の国立

公園が誕生した。指定記念式典は7月26日に札幌市公民館で催された。引き続き出席者は支笏湖、次いで洞爺湖へ移動して、それぞれ式典が行われている。

新たに誕生した支笏洞爺国立公園は支笏湖、洞爺湖、登別、定山渓の各地区と樽前山、有珠山、昭和新山の3活火山で構成され当初総面積は約9万8332ヘクタール。現在は約9万8660ヘクタールで、そのうち支笏湖地区は約2万9834ヘクタール。

公園計画　国立公園指定は行われたものの、公園管理の基本となる公園計画が示されたのは昭和27年10月になってからだった。

最初に示されたのは湖畔集団施設地区（S32・10・1区域指定）の一般計画で、千歳川左岸は現在の商店街（売店区）の東側に隣接する駐車場周辺を公共施設区として、売店区の北側を宿舎区（旅館地区）、さらにその北側を住宅区、駐車場の道路を挟んで東側を野営場区、売店区の南側と千歳川左岸と湖岸一帯を園地。千歳川右岸は東部を自然植物園、湖岸に面した西部は展望園地と位置付けている。厚生省は公園計画を示した翌年の28年4月に、それまで北海道に委託していた管理を直接行うため国立公園管理員（現・環境省自然保護官＝レンジャー）1人を配置した。翌29年には湖畔集団施設地区の大半が農林省（林野庁）から所管替えされたことを受けて、国立公園管理員が1人増員され2人体制となった。

図４－１　昭和32年指定の湖畔集団施設地区計画図（S33頃『国立公園支笏洞爺　千歳市　支笏湖　案内図』より）

29年9月には特別保護地区、特別地区、単独施設区、道路、歩道、埠頭桟橋の指定が次のように行われた。

・特別保護地区（現状の姿を将来に残す）＝オコタンペ湖地区（790ヘクタール）と樽前山地区（85ヘクタール）。

・特別地区（特別な事情がない限り現状のまま維持する）＝漁岳・オコタンペ地区（2538ヘクタール）、湖畔地区（2万115ヘクタール）、美笛地区（493ヘクタール）。

・単独施設区（地区ごとに設置する）＝オコタンペ湖（休憩舎）、恵庭岳（避難小屋）、ポロピナイ（休憩舎）、丸駒温泉（休憩舎、簡易宿舎、桟橋）、オコタンペ河口（宿舎、野営場、桟橋）、美笛（休憩舎）、モラップ（野営場、広場、桟橋）、樽前山（避難小屋）。

・道路（車道）＝中山峠美笛線（豊平町－美笛）、石切山ポロピナイ線（恵庭岳－ポロピナイ）、支笏湖周遊線（苫小牧市丸山－モラップ－美笛－丸駒－ポロピナイ）、千歳湖畔線（千歳町分岐－湖畔）、苫小牧湖畔線（苫小牧市丸山－分岐）。

・道路（歩道）＝豊平峡支笏湖線（豊平町－オコタンペ河口）、恵庭岳登山線（ポロピナイ－恵庭岳山頂－オコタンペ湖）、ポロピナイモラップ線（ポロピナイ－湖畔－モラップ）、樽前山登山線（苫小牧市樽前覚生川上流－樽前山頂）。

・埠頭桟橋＝湖畔、ポロピナイ、美笛。

王子倶楽部別邸と翠明閣　湖畔集団施設地区の一般計画が示されたことで、湖岸や千歳川河岸の売店のほか交番、郵便局など公的施設の移設、湖岸に並んでいた遊覧船やボートの桟橋の統合も行われた。32年ごろまでに

は売店などの移転がほぼ終了している。

この中で、園地とされた区域にあった王子製紙㈱苫小牧工場の倶楽部別邸（支笏湖倶楽部・別邸）、翠明閣（現・レイクサイドヴィラ翠明閣）など同社関連施設の扱いについては、厚生省、道、同社による協議が行われた。別邸は大正7（1918）年に支笏湖訪問を計画していた閑院宮同妃若宮殿下を迎えるために5年に建設した当時北海道一と言われた総檜造りの貴賓館で、同殿下をはじめ昭和20（1945）年8月の清宮貴子内親王まで、皇族が19回利用している（詳細は後述）。翠明閣は、王子製紙と菱中興業の山林関係者と来遊者用の旅館として大正7年から営業を行っていた。

協議の結果、別邸は「天皇陛下御宿所の記念館として永久に保存する」。翠明閣については「建物が自然倒壊の状態になるまでは、現在地に存置旅館営業を行うことを認める」。そのほか千歳川呑口付近にある施設、住宅などは移設することなどが了解されている。

集団施設地区　集団施設地区は昭和32年10月1日に区域指定が行われた後、49年10月7日に区域変更と詳細計画が決定されている。

対象は湖畔地区約41ヘクタール（環境庁所管地約26・5ヘクタール）とモラップ地区約6・6ヘクタール（同約5ヘクタール）で、その基本方針は①支笏湖畔地区とモラップ地区を一体化し支笏湖畔探勝の基地として計画する　②支笏湖畔地区のうち千歳川左岸一帯は環境の美化に重点を置いて計画するとともに、当該地の過剰利用を分散するため千歳川右岸地区への導入をはかる　③千歳川右岸地区は園地利用に重点を置いて計画するとともに国民休暇村として整備し健全且つ教化的な利用の促進をはかる　④モラップ地区はその優れた自然環境の維持に留意し、既存野営場を中心にその整備充実をはかる。なお、本地区は湖畔探勝ルート上の休憩地として園地的利用を考慮する　⑤本地区の諸施設から排出される汚水を処理するため集中下水道及び終末処理場の整備をはかる―の5項目。

その地割方針は①湖畔地区の中央を通る道道支笏湖洞爺線（現・国道453号）に沿って整備された駐車場を中心とする一帯を公共施設区とし、同地区の管理運営の中枢とする　②旅館、ホテル、寮、保養所等からなる一帯はその環境を維持し、湖畔景観との調和を図るため、各施設の種別に応じ第1宿舎区、特別宿舎区（現・支笏湖市民センター一帯）、住宅区に地割し、施設の新増設を抑制するよう計画する　③千歳川左岸及びこれにつながる湖畔一帯は園地区とし湖畔の自然環境を維持するとともに休憩散策及び舟遊びの場とする　④千歳川右岸は、その大部分を園地区とし、台地上部の平坦な疎林地に小規模な公共施設区及び第2宿舎区を設け、旧林道跡を活用して本地域への到達道路を計画する　⑤地区東部の傾斜地は、その森林景観を保護するため修景地区とする　⑥モラップ地区は野営場区とし、主にテント野営場を計画する―とされた。

各区の主な整備方針は、

・公共施設区＝玄関口として施設周辺の環境美化に努める。千歳川右岸と左岸を連絡するため橋梁を架設して右岸台地への到達道を設ける。千歳川左岸駐車場西側に博物展示施設（現・支笏湖ビジターセンター、S55開設）を設ける。

・第1宿舎区（千歳川左岸の旅館・ホテル地区）＝宿舎の新設は計画しない。本地区の収容力は1000人を限度とする。

・第2宿舎区（千歳川右岸台地上）＝低廉かつ健全な宿泊施設1棟（現・休暇村支笏湖、S52開村）を計画。収容力は250人以内とする。

・園地区＝湖畔および千歳川河岸の環境を維持するために不用な建築物は撤去するとともに植栽工等により積極的な美化を図る。既存の翠明閣は今後

改築に際しては休憩所にするよう指導する。千歳川右岸は東部を自然植物園、湖畔に面した西部を展望園地とする。

・特別宿舎区＝寮、保養所の新設は許可しない。

・売店区＝既存の食堂、売店兼休憩所等を整理統合し環境の美化に努める。

・野営場区＝野営地の整備充実を図るとともに駐車場を中心に一帯を園地として利用できるよう広場、駐車場等を整備する。既存の売店は新設駐車場の西側に移設し、跡地を芝生広場として整備する。

なお、各区の整備方針の中で、増改築を含む建物の高さを13㍍以下、勾配屋根としている。

公園計画見直し　環境庁は昭和51年、支笏洞爺国立公園全域の公園計画見直しに着手した。これまでは集団施設地区や道路、施設など個別の変更を行ってきた。今回は利用の増加、多様化を受けての全面的な見直しだったが、54年に羊蹄山地域の再検討が終了しただけでその後の作業は遅れ、支笏湖集団施設地区についての区域変更と詳細計画が示されたのは平成７年（１９９５）年８月。新たな公園管理計画（改訂）が公示されたのは８年３月だった。

公園管理計画では、支笏湖一帯の公園管理の現況について「風致景観の維持を図るため、公園指定以来、関係機関の協力のもとに高さ、デザイン、材料、色などに配慮した施設作りが進められてきており、国立公園の一つのモデル地域となっている」として、国立公園指定以来続く基本方針を維持していくことを強調。特にホテルなどの建築物については「勾配屋根、高さ13㍍以下、屋根及び外壁の色彩は屋根が赤褐色又はこげ茶系、外壁は白、灰色系などの中間色」と従来通りの方針を明記している。

スノーモビルと動力船規制　公園計画の見直しが進められていた平成２（１９９０）年12月、環境庁は自然環境保全法の一部改正を行って全国10国立公園の15地域でスノーモビルの乗り入れ規制を実施した。車馬等の乗り入れ規制で、支笏湖地区では支笏湖南岸のモラップから美笛間と樽前山、風不死岳を含む約５６００㌶が規制地域となった。

スノーモビルに次いで問題となったのは昭和60年代から急増した水上オートバイなどレジャー用小型船舶（プレジャーボート）。水質悪化をはじめ水生植物の荒廃、騒音、ごみなどの問題が年々深刻化し、平成２年に市、環境庁など13機関・団体が「支笏湖におけるプレジャーボート問題等対策会議」を立ち上げて対策に乗り出したが、法律や条例などが絡み実効性のある規制は関係機関の調整が進まずに難航した。このため環境庁は18年２月に車馬等の乗り入れ規制地区（樽前山地区）に支笏湖湖面７８７６㌶を加える公園計画の変更を行い、旅客遊覧船、漁船、河川管理船、公園事業使用船など規制適用除外船以外の利用を規制した。この中で、特例としてヒメマス解禁期間中（６月～８月）の承認されたボート事業者預かり船、貸し船、持ち帰り船が承認されている。

次に公園管理計画が改訂されたのは22年４月で、支笏洞爺国立公園の将来目標を多様な火山景観の維持と生物多様性の確保、自然景観と温泉を楽しめる保養地、地域に応じた適正な利用により快適な利用環境の確立、環境に配慮した公園利用の推進、多様な主体の参画による公園管理とした。支笏湖地区では国立公園指定当初からの方針どおり開発行為による改変の抑制を第一に挙げ、さらに人為的に改変された植生の復元対策と外来種対策、環境学習の場、環境配慮型施設の導入とリピート型・滞在型観光の施策への導入検討、パークボランティアやＮＰＯなど多様な主体との連携を掲げている。

支笏洞爺国立公園指定50周年記念フォーラム

支笏洞爺国立公園指定50周年を祝う事業は平成10（１９９８）年、環境

庁が道内の小中学校に呼びかけた「支笏洞爺スタンプデザインコンクール」の募集から始められた。同公園内50ヵ所の景勝地を指定して50種類のスタンプを作製し、同公園内を巡るスタンプラリーを行う事業。道内96校から１５７７点の応募があり、グランプリに登別市立富岸小学校５年久保美沙希の「登別マリンパーク」、準グランプリには千歳市立支笏湖小学校５年佐々木靖治の「オコタンペ湖・漁岳」、虻田町（現・洞爺湖町）虻田中学校３年真屋和可子の「洞爺湖温泉から見た洞爺湖」などが選ばれた。スタンプ作製は優秀賞以上の作品で、千歳市内からは佐々木のほか小学生３人、中学生６人が選ばれている。

11年３月26日、関係16市町村による記念事業実施団体として「支笏洞爺国立公園連絡協議会」の設立総会が札幌市内で開かれ、会長に東川孝千歳市長を互選し、記念事業の基本テーマを「神秘の歴史、透明な未来」と設定した。記念式典となる「50周年記念フォーラム」を支笏湖湖水まつり開催と合わせた７月10日に支笏湖温泉で開催するほか、小中学生から募集したスタンプデザインによる「支笏洞爺スタンプラリー」（８月１日～10月31日）、記念誌発行等の実施が決められた。また、支笏湖や洞爺湖など地区ごとの記念行事実施も確認された。４月には樽前山と支笏湖、遠方に雪を抱いた羊蹄山が写った航空写真を使ったＰＲポスターが完成した。

図４－２　支笏洞爺スタンプデザインコンクールで準グランプリに選ばれた支笏湖小学校５年、佐々木靖治の「オコタンペ湖・漁岳」

５月には各地区の記念事業計画が出そろった。支笏湖地区では「指定50周年記念事業支笏湖実行委員会」（４月12日設立）の主催で記念祝賀会のほか樽前山クリーン作戦（６月、主催苫小牧市）、樽前山山開き登山（同同）、子どもパークレンジャー（７月～12年２月、環境庁）、ふるさと自然探検隊ＩＮちとせ（８月、同実行委員会）、自然歩道を歩こう会（10月、環境庁ほか）で、各地区の個別事業は合わせて33事業となった。

メーン行事が開催される支笏湖温泉街では、７月に入ると山と湖をデザインした支笏洞爺国立公園のシンボルマーク入りの歓迎旗（縦60㌢、横45㌢）と横断幕が設置され、式典ムードを盛り上げた。

支笏湖温泉の特設会場で開かれた記念フォーラム開会式では、主催者を代表して東川孝会長があいさつ、鹿野久男環境庁長官官房審議官が祝辞を述べ、支笏洞爺スタンプデザインコンクールの表彰式が行われた。

記念フォーラムは２部構成で、第１部では作家でナチュラリストの「ムツゴロウ」こと畑正憲が「ムツゴロウ大いに語る」と題して基調講演。第２部は「ムツゴロウと16人の子供たち」と題して、支笏湖小学校５年の佐々木靖治ら関係16市町村の小中学生16人とともに国立公園の未来について語り合った。フォーラムの様子を伝える『千歳民報』などによると、第１部の基調講演で畑が「日本の自然保護の欠点はガイドをつけない、監視システムがない、お金がない―の３点」、「頭や心を使って一生懸命考える人がいなければ、自然は保てない」などと管理体制整備の必要性を説いた。第２部では、畑が子どもたちと意見を交わしながら自然を学ぶための実体験の必要性を強調した。

また、10月31日に締め切られた「支笏洞爺スタンプラリー」は全国から１２０２人の応募があり、このうち50ヵ所のスタンプ全てを集めたのは

１５２人、30ヵ所以上は４２５人、10ヵ所以上は６２５人だった。

ユースホステル「赤い三角屋根」

昭和30（１９５５）年１月、北海道ユースホステル協会が他の都府県協会に先駆けて設立され、全国のモデルケースとなることが期待された。同年３月には同協会の常任理事会において道内５施設がユースホステルとして決定され、その中に支笏湖地区から丸駒温泉旅館が認定されている。収容人数は50人、宿泊料金１５０円（朝夕食の米持参で３００円）であった。

29年、現在のユースホステルの場所にあった支笏湖小学校が新築移転し、旧校舎の払い下げを受けて改装、30年に国内初のユースホステル専用の支笏湖ホステルとして開業した。２つの教室を男女別の寝室に分けて畳を敷き、廊下と水飲み場を洗面所と炊事場、教職員室を管理人室に改造した。風呂は釜の下から直接火を焚く五右衛門風呂。30組の布団、炊事用具を整えると総費用は60万円となり不足分は募金で集めたという。開業当時のペアレント（ユースホステルの管理人）は、後にペアレントとなる吉川悦子の両親である木本夫妻であった。

その後、北海道を代表する建築家・田上義也の設計により全国競輪施行者協議会からの補助を受けて全面改築され、35年７月、支笏湖の自然環境に調和した欧州風のモダンな建物「赤い三角屋根」が完成し、日本ユースホステル協会直営第１号のユースホステルとなった。木造２階建、延べ床面積５９８・０３平方㍍。建物の平面は十字体系で、出入口側はピラミッドのような三角の顔、急勾配の屋根が地面まで伸びている。オープン１年後の『北海道新聞』（Ｓ36・７・22）では「一年間の利用者は九千人に達し、八割が女性、外人の利用も相当あり、ドイツ人、アメリカ人、ポルトガル人など二百人あまりが訪れた」と報じられた。42年７月には宿泊施設が増築され収容人数は１５０人から２５０人となった。

国内のユースホステル利用者は昭和40年代中頃から50年代初めにピークを迎え、支笏湖ユースホステルも46年から49年には年間宿泊者数が２万人を超えた。しかし近年は利用制約や宿泊形態の多様化などから徐々に宿泊客は減少し、平成５（１９９３）年度には１万人台を割り16年度は２０００人台となった。日本ユースホステル協会は運営を直轄から委託へと移行し、支笏湖ユースホステルも16年度から地元のＮＰＯ法人支笏湖まちづくり機構Ｎｅｏステージに運営を委託されたが、宿泊客の減少が続き19年３月に撤退した。昭和46年から61年まで初代ペアレントである両親の後を引き継いだ吉川悦子は、「赤い三角屋根」の存続を願い、平成19年４月、21年ぶりに再びペアレントとなった。

写真４－１　発足当時の支笏湖ホステル。左右が木本ペアレント夫妻（北海道ユースホステル協会提供）。

国民休暇村

高度成長期（Ｓ30～48）を迎え、自然の中での余暇を楽しむ国民の増加を受けて当時国立公園を所管していた厚生省は、自然公園などそれまでの温泉旅行とは違う低廉で清潔な宿泊施設を中心とした上質な利用施設を整備する「国民休暇村構想」を計画。昭和36（１９６１）年12月に㈶国民休

暇村協会（現・休暇村協会）を設立して、翌年7月には第1号となる近江八幡国民休暇村（滋賀県）を開設して構想の推進を図った。千歳市では、この第1期整備計画当初から支笏湖・幌美内地区を候補地として誘致活動を展開したがかなわなかった。

ところが、40年代のレジャーブームで休暇村利用者が急増したため、46年に厚生省から国立公園の所管を引き継いだ環境庁が、47年から施設数を倍増する第2期整備を推進した。道は支笏湖畔（現・支笏湖温泉地区）と大雪ダム周辺を候補地として同庁に調査を申請。これを契機に千歳市は再び誘致活動を強化した。

道では支笏湖畔を有力とし、中モラップを中心として支笏湖畔からモラップに至る地域での計画策定を進めたが、環境庁所管地は支笏湖畔とモラップのみで残りは林野庁所管地だった。国民休暇村は、宿泊施設にスキー場や野営場などを加味した総合的な保健休養施設とされるが、同庁所管地内にあるのはモーラップ[1]野営場のみで、そのほかの施設展開ができるのはスキー場がある林野庁所管地の中モラップ地区だけだった。このため、道では用地交渉を進めたが、林野庁では対象地の所管替え（買収）を主張して難航した。

用地交渉が進展しないため、道は規模を縮小して支笏湖畔の千歳川右岸のみで計画を策定。環境庁の自然環境保全審議会による承認を得て48年9月の着工を予定したが、オイルショックによる原油価格高騰に対処する国の石油緊急対策（総需要抑制策）で予算が凍結されて延期となった。同審議会の承認は予定より一年遅れた50年5月となった。

工事は同年12月に湖畔の温泉街から千歳川を渡って宿舎建設地までの連絡橋（湖畔橋）と連絡道路建設から着手。宿舎の起工式は翌51年9月27日に行われた。合わせて園地と園路、駐車場の整備も進められた。

全国で28番目の「支笏湖畔国民休暇村」の開業は52年9月19日。鉄筋コンクリート造り一部3階建て、延べ床面積は2777平方㍍。和室36室、100人収容会議室1室、150人収容宴会場1室、収容人員150人。支笏湖畔で開業より2年前に掘削された温泉も引かれた。工費は付帯工事も含め3億6000万円。

9月に開業したため同年度の宿泊利用者数は4283人だったが、翌53年度は1万3305人。平成2（1990）年度には2万429人となった。11年には大規模な改修工事が行われ、増加傾向にあった個人客に対応するため36室の和室を12室にして洋室を27室としたほか身障者向け設備も備えられた。リニューアルオープンは翌12年4月27日だった。

国民休暇村は自然に親しむ施設を一体として設置が進められており、休暇村宿舎完成前の昭和51年5月7日に「支笏湖野鳥の森」がオープンした。野鳥の森は、環境庁が国有林を利用して野鳥保護の思想を普及させようと47年度から整備が始められた。支笏湖は道内2ヵ所目の整備で、中モラップから休暇村までの約100㌶の林内に幅1㍍、長さ1544㍍の野鳥観察路と野鳥観察舎などが設けられた。野鳥観察路は、厚生省が41年度に整備済みの自然研究路と組み合わされモーラップ野営場まで行けるようになっている。休暇村誘致の条件となっていた千歳市営モーラップ野営場の管理運営受託の実現は平成5年になってからだった。

なお、8年4月には施設名を「支笏湖畔国民休暇村」から「支笏湖畔休暇村」に、11年4月には「休暇村支笏湖」に改称した。

註（1）「モーラップ」とは千歳市の字名「モラップ」の通称であり本稿ではモラップを原則とするが、一部引用部分と固有名詞などは併記する。

王子製紙苫小牧工場倶楽部別邸

王子製紙㈱苫小牧工場は明治43（1910）年9月に操業を開始した。

1年後の44年9月12日に皇太子（後の大正天皇）が工場を視察された（後に視察日を苫小牧工場操業記念日とする）。この時の迎賓施設が工場正門前の「倶楽部」であった。当時、苫小牧を訪れた皇族は支笏湖を訪れるのが常であったが湖畔（現・支笏湖温泉地区）には迎賓のための施設は未だなかった。

大正7（1918）年に閑院宮載仁（ことひと）親王の来道が予定され、その御泊所として湖畔に建設されたのが総檜造りの豪奢な倶楽部支笏湖別邸（別邸）で5年に完成した。場所は現在の集団施設地区湖側の中央広場であった。別邸完成の2年後、7年8月25日に閑院宮、同妃、若宮殿下が宿泊されている。

別邸は11年7月に皇太子（後の昭和天皇）が摂政として支笏湖に行啓した際に御休所として利用された。この時、工場では専用鉄道（山線）の客車を貴賓車に改造して湖畔までの交通の便とした。閑院宮載仁親王から昭和20（1945）年8月の清宮貴子（すがのみやたかこ）内親王（昭和天皇第五皇女・島津貴子）まで戦前戦中において19回にわたって皇族の宿泊があった。

湖畔では27年に国立公園支笏湖の集団施設地区が計画され、29年（S32説あり）には区域が指定された。結果、別邸は商店街に隣接となり静けさを保ちづらい面がでてきた。このため、「支笏湖畔モーラップ山麓」で36年に開催される第12回植樹行事並びに国土緑化大会（全国植樹祭）のため昭和天皇、香淳皇后が来道、宿泊されるのを機会にシリセツナイ川の右岸、水産庁北海道さけ・ますふ化場千歳支場支笏湖事業所上手の高台である現在地に移築することとした。

35年8月から敷地の整地に取りかかり、その年のうちに移築と約160平方メートルの離れ座敷を増築し別邸は1000平方メートルほどの広さとなった。増築部分は本道産のトドマツ、アカマツの板壁で山荘風の優美な建物であり、イタヤカエデ、クリ、ナラの林に囲まれていた。

昭和天皇と香淳皇后は全国植樹祭御臨席のため36年5月23、24日の両日、新築なった離れに宿泊し昭和天皇は別邸を詠まれた。

御製　湖をわたりくる風はさむけれどかへでの若葉うつくしき宿

また、北海道百年記念祝典御臨席で43年8月31日にも宿泊され、翌日は千歳駅から御召列車で札幌に向かった。

今上天皇は皇太子殿下として49年8月4日から6日まで別邸に滞在、千歳原における第6回日本ジャンボリーに御臨席された。また、62年9月の第11回全国育樹祭の折にも妃殿下とともに小憩された。

支笏湖ビジターセンター

支笏湖ビジターセンターは、環境庁が支笏洞爺国立公園支笏湖地区利用者への自然や人文紹介、自然保護思想の高揚を図る中心施設として昭和55（1980）年5月1日に開設した。阿寒国立公園に次ぐ道内2番目の施設で、事業費は約6900万円。環境庁が建物、千歳市が展示物をそれぞれ負担している。

開設当初の名称は「支笏湖自然科学館」だったが、開設翌年8月に出された同庁の「博物展示施設（ビジターセンター）整備基本計画作成要領」と「同手引き」で、「利用者に理解され易いように『地区名＋ビジター・センター』という名称を用いる」としたことを受けて、現在の名称「支笏湖ビジターセンター」に改称された。

自然科学館の建物は、鉄筋コンクリート造り、平屋建て床面積398・96平方メートル。その規模について、前出の手引きで「標準規模を四百平方メートル」としており、ごく標準的な施設が建てられたことになる。

展示は大きく5部門に分かれ、エントランスホールの第1部門では支笏湖地区全体をパネルなどで紹介、第2部門はヒメマスの歴史や生態などを

紹介する「湖のいきもの」コーナー、第3部門は支笏湖カルデラの誕生や樽前山溶岩円頂丘（ドーム）の生成過程などをジオラマや岩石標本などで紹介する「支笏カルデラ」コーナー。第4部門「支笏の森」は森の動植物や苔の洞門などを紹介。第5部門にあたるレクチャールーム（54席）には、支笏湖の四季をスライド上映する35ミリ2面マルチスライドなどの視聴覚機器を備えた。開館時間は午前9時30分～午後4時30分（通年）。

施設管理は、自然公園内の美化清掃および利用施設の維持管理を目的として54年6月に設立された環境庁所管の㈶自然公園美化管理財団（現・自然公園財団）が、同年7月1日に支笏湖支部を開設して受託。その事業費の一部として同年7月25日から支笏湖畔（現・支笏湖温泉）駐車場有料化が実施され、利用者から料金（協力金）を徴収している。

環境庁は、公園利用者の増大に伴うゴミ処理などの費用について、当初は入園料などによる一部負担を検討したものの、公園施設の利用に際しての負担の方が実情になじみ国民の理解が得られやすいとして、当面「駐車場」と「野営場」に特定して協力金を徴収する制度を設けた。

現在のビジターセンターは、環境省の支笏湖地区における自然公園核心地域総合整備事業（緑のダイヤモンド計画）の目玉事業として増改築（H14・5～15・7）が行われ、平成15（2003）年7月5日にリニューアルオープンした。木造一部鉄筋コンクリート造り、建築面積1203平方メートル、延べ床面積997平方メートルで、総事業費は6億7600万円。開館時間は、4月～11月が午前9時～午後5時30分、12月～3月が午前9時30分～午後4時30分。

年間利用者の推移は、開設5年後の昭和60年に100万人、平成2年に200万人、22年には500万人と伸び、27年11月に600万人に達している。

参考文献

加治隆『自然公園における休暇村成立の意義と公園利用への効果に関する研究』2009年／休暇村協会『休暇村協会創立50周年記念誌』2012年／国立公園協会『2011自然公園の手引き』／支笏湖関連各種パンフレット／支笏洞爺国立公園指定50周年関連各種パンフレット／支笏洞爺国立公園連絡協議会『支笏洞爺国立公園指定50周年誌』1999年／自然公園財団『自然公園財団事業報告』（平成24～26年度）、『新・美しい自然公園4　支笏湖』、『パークガイド支笏湖』2008年、『パークガイド・支笏洞爺国立公園、支笏湖』／高橋長助『国立公園支笏湖沿革史（草稿）』1972年、『国立公園支笏洞爺　千歳市　支笏湖　案内図』1958年ごろ／俵浩三『国立公園としての支笏湖と洞爺湖の発展過程の対照性』1987年／千歳市『千歳市史』1969年、『増補千歳市史』1983年／千歳観光協会『観光の千歳　国立公園の支笏湖』1949年／千歳支笏湖保勝会『観光地支笏湖案内　支笏湖を行く』1947年／苫小牧市『苫小牧市史上巻』1975年、『苫小牧市史下巻』1976年／中村康文「湖畔の赤い三角屋根」『志古津』第6号千歳市2007年／日本自然保護協会『支笏湖の自然観察』1982年／日本ユースホステル協会『日本ユースホステル運動50年史』2001年／北海道ユースホステル協会『北海道ユースホステル運動20年史』1975年、『北海道ユースホステル運動50年史』2005年／守屋憲治「千歳音頭と支笏湖」『志古津』第14号2011年、「支笏湖モラップ山麓における植樹祭」『志古津』第21号2015年／『千歳民報』／『苫小牧民報』／『北海道新聞』

第2項　支笏湖の自然

ピスンモラップ山とキムンモラップ山

支笏湖温泉とモーラップ野営場間の湖岸に2つの山があり北側（支笏湖温泉側）に位置するのがキムンモラップ山（478メートル）、南側に位置する

のがピスンモラップ山（５０６・４㍍）。ともに、新第三紀の鮮新世（５３０万年前～２６０万年前）後期から第四紀の更新世（２６０万年前～１・２万年前）前期に起きたイチャンコッペ山溶岩、タップコップ山溶岩、モーラップ山溶岩などデイサイトの火山活動の一環として形成された火山で支笏湖東側外輪山（カルデラ壁）を形成している。

山名について、長見義三は『ちとせ地名散歩』（１９７６年）の中で、モラップを「モ・ラ・プ（小さな・低い・もの）」として、２つの小山が本来のモラップで、北側がキムンモラップ（山手のモラップ）、南側がピスンモラップ（浜手のモラップ）と説明している

２つの山はマグマが固まった安山岩でできており、モーラップ野営場から支笏湖温泉の千歳川呑口までの湖岸や湖底には、安山岩が冷えるときに収縮して規則的な割れ目になった柱状節理が露出している。この岩は、明治40年代の王子製紙千歳川第一発電所、昭和30年代の支笏湖グランドホテル（奥潭）などの建設資材に使われた。

ピスンモラップ山が注目されたのは、国設モーラップ山スキー場が開設された昭和38（１９６３）年からで、それ以前は温泉街からモラップ地区への歩道があった。41年に当時国立公園を所管する厚生省が温泉街とモーラップ野営場を結ぶ自然研究路約４㌔を整備している。ピスンモラップ山の標高は三角点の５０６・５㍍とされているが、実際の最高点は三角点の西側にある。

スキー場開設で２つの山の間に位置する中モラップが注目され、44年12月には千歳市支笏湖青少年研修センター、49年10月には労働省所管支笏湖勤労青少年フレンドシップセンターが相次いで開所された。しかし、平成13（２００１）年にスキー場が閉鎖されると、15年３月にフレンドシップセンター、17年３月に青少年研修センターが相次いで閉所されている。両センターはともに青少年を主な対象にした宿泊研修施設で、開設当初は多くの利用があったものの、老朽化した施設の統合ができないまま利用目的の変化に対応できず利用者は減少していった。

キムンモラップ山の北側平地（河岸段丘）は、国立公園指定後「自然植物園」として天然林の中に遊歩道や小規模なステージが設けられていた。昭和48年に支笏湖畔国民休暇村の建設が決まると、この平地を中心に造成が行われて宿舎と園地になった。湖岸に面した西側約１００㌶は、51年に「野鳥の森」として整備され前出の自然研究路と組み合わされた野鳥観察路や野鳥観察舎が設置された。

紋別岳

紋別岳（８６５・６㍍）は、新第三紀の鮮新世（５３０万年前～２６０万年前）後期から第四紀の更新世（２６０万年前～１・２万年前）前期に起きたイチャンコッペ山溶岩、タップコップ山溶岩、モーラップ山溶岩などデイサイトの火山活動の一環として形成された火山で支笏湖の北東側外輪山（カルデラ壁）を形成している。

山名は、この山を源とする紋別川からきているとされ、「紋別（もんべつ）」はアイヌ語の「モ・ペッ＝モベツ」が和人に伝えられる中で「モンベツ」に変化したと考えられている。長見義三は『ちとせ地名散歩』（１９７６年）の中で、知里真志保の『地名アイヌ語小事典』から「本流を親と考え、それに対して支流を『ｍｏ―』で表すことも多い。千歳川の支流モベツではなかろうか」としている。

山頂からの眺望は素晴らしく、昭和35（１９６０）年に発行された札幌山岳クラブの『北海道の山々』で「紋別岳は支笏湖の大展望台」、千歳市の『要覧ちとせ』でも39年版から10年以上にわたって「北海道の５分の１の地域を一望に眺めることができる」と紹介している。

この眺望の良さを利用して27年に国家地方警察の無線中継所が設置された。この工事に使われたのが旧登山道。工事に雇われた支笏湖温泉の坂野春雄によると、登山道はシリセツナイ沢に沿って登り詰めて、頂上から南に延びる尾根に入ったという。31年には山頂に一つの電波で多数の電話を同時に伝送できる超多重電話とテレビ中継のために日本縦断幹線マイクロ波回線中継の支笏湖無線中継所が建設された。この建設工事と保守管理のために造られた自動車用道路が現在の登山道になっている。42年夏まで一般車両に開放されていた。

旧登山道時代から、春から秋を中心に多くの登山者が訪れていた。29年6月26・27日に開催された第1回支笏湖湖水祭りのイベントとして「紋別岳ハイキング」が行われている。また、33年には支笏湖スキー場が開設されている。前出の『北海道の山々』には「冬季、相当の積雪と適当なスロープにも恵まれているので、スキーを楽しむにも手ごろである」と紹介されており、スキー目的の入山も多かったようだ。支笏湖周辺の恵庭岳や風不死岳、樽前山については「登山」が使われるが、紋別岳だけは「ハイキング」が使われることが多いのは簡易舗装された自動車道を使うためだろうか。

登山者の増加を受けて千歳市、千歳市山岳遭難救助隊が登山口に登山者名簿を設置したのは平成16（２００４）年8月になってからで、16年度の名簿記入者は３０６人、18年度４８３人、23年度６４６人と１０００人以下が続いたが、26年度は一気に２３５８人に増加している。登山名簿記入者数が公表される同救助隊の総会を報じる『千歳民報』には、毎年のように「名簿に記入しない登山者が多い」などの関係者コメントが載せられている。

風不死岳

風不死岳（１１０２・３㍍）は、支笏火山が噴火し支笏カルデラを形成した後に噴火した「後カルデラ火山」の風不死岳、恵庭岳、樽前山の3火山の中で最初に誕生した。その活動は約4万年前に始まった。これまでよく分からなかったが、平成19～21（２００７～09）年に北海道大学大学院理学研究科の中川光弘教授（火山学）らが風不死岳南西山麓の苔の洞門上流と白老町社台の地層や堆積物の調査の結果、約８５００年前にマグマ水蒸気噴火、約４５００年前に水蒸気噴火を起こしていることが分かった。気象庁の火山噴火予知連絡会は、活火山を過去1万年前以内に噴火した火山、現在活発な噴気活動がある火山と定義しており、中川教授らの研究結果を受けて23年6月に、これまでの樽前山を「樽前山・風不死岳」として、一つの活火山として認定した。

山名は、アイヌ語の「フップ・ウシ（トドマツ・の群生するもの）」、「フプ・ウシ」、「フプシヌプリ」が語源。群生するトドマツは昭和29（１９５４）年9月の15号台風（洞爺丸台風）で大きな被害を受け、現在、その面影はない。

22年に発行された千歳支笏湖保勝会の『観光地支笏湖案内　支笏湖を行く』で、風不死岳は「支笏湖畔に聳立する急峻な円錐形の独立火山、現在全く死滅し浸食が進んでいるので火口も分からない」と紹介されている。24年に千歳観光協会発行の『観光の千歳　国立公園の支笏湖』には山名を「フプ（腫物）シ（大きな）＝大きな腫物という意」としたうえで「山頂は眺望もよく、湖水を見下ろす眺めも一段とよく、高山植物も生育している」と、ともにわずかな紹介が載っているだけ。

風不死岳が一般の登山対象となったのは30年代に入ってからで、前出の『北海道の山々』で「現在のところとくに登山コースというものはな

く、踏跡も少ないから、中級以上の人に向くルートとして、南九三一メートル峰（現・九三二峰＝北山）から稜線伝いに北上するもの、湖側から大沢を遡行して頂上に達するもの、熊ノ沢・一ノ沢をたどるものなどがとれるが、とくに前二者がよい」と初めてルート解説を行っている。

この「前二者」については、30年10月に設立された苫小牧山岳会が33年に大沢の登山ルートを決めて道内山岳関係者に紹介、35年には南九三一メートル峰から稜線伝いに北上するルートの整備を行っている。大沢の名称は「同岳北面の大きな沢」からそのように呼ばれるようになったが、大正から昭和にかけて支笏湖周辺で造材作業に携わった山田金次郎が大正初期に登ったといわれ、長らく「金次郎の沢」と呼ばれていた。

大沢ルートは、沢伝いに高巻き（悪場を避けて迂回）が必要な高さ10メートル以上の滝が連続する難易度の高いルートで遭難事故も多く、さらに出水などによるルートの荒れも年々ひどくなっていることから、平成に入って千歳山岳会が中心となって代替えルート設定を計画し、南支笏7号林道を登山口とする「北尾根コース」を整備して平成11年に公表している。

登山者の増加を受けて千歳市、千歳市山岳遭難救助隊が、北尾根コース登山口に登山者名簿を設置したのは16年8月になってからで、16年度の名簿記入者数は383人、19年度492人。23年度523人、25年度815人、27年度1250人。

恵庭岳

恵庭岳（1320メートル）は2万年以上前に活動を開始し、約2万年前に大規模な噴火が発生して山体を形成、以降溶岩流出を伴う噴火が続いた。最後のマグマ噴火は約2000年前に発生し、流出した溶岩がオコタンペ川を堰き止めてオコタンペ湖を出現させた。17世紀はじめに山頂部で水蒸気爆発が発生し崩壊物が岩屑（がんせつ）なだれとなって支笏湖に流入している。その後も噴火が続き、18世紀にかけての約150年間に少なくとも2回の水蒸気噴火が起きている。気象庁は平成3（1991）年2月に活火山に指定した。

山名は、アイヌ語の「エ・エン・イワ（頭・尖った・岩山）」が語源。長見義三は『ちとせ地名散歩』（1976年）の中で、知里真志保著作集（1973年）から引用して「エエンイワのイワはカムイイワキ（神の住む所）から出ていて、今はただの山の意に用いているが、もとは先祖の祭場があった神聖な山を言ったらしい」としている。

江戸末期あるいは明治初期には硫黄採掘が行われていたようで、高橋長助の観光パンフレット『あなたを待つ支笏湖』（1972年）によると、恵庭岳の麓・幌美内にある「大平山」と刻まれた石碑がその証という。出羽秋田新田藩（岩崎藩）最後の藩主だった佐竹義理が、恵庭岳での硫黄採掘の安全と成功を祈願するため、秋田県を代表し信仰の対象だった三吉神を祭ってある太平山（1170メートル）の名を刻んで明治5（1872）年に建立したとしている。建立した場所は不明だが、支笏湖温泉在住の小野寺正利は「『大平山』は50数年前、父と一緒にポロピナイから運んできて、10年間ほど家の庭にあったが、やはりまずいということになって、ポロピナイの湖岸に置いた」。湖岸に置かれた石碑について支笏湖観光センターの小林典幸は「湖岸にあったが、奥のマツの所に移した。その後現在地に移して屋根を架けた」（ともに平成27年5月15日談）と話している。

昭和3（1928）年5月17日、伊藤弘団長（後の伊藤木材社長、支笏湖観光ホテル社長）ら漁村（現・恵庭市）青年団御料分団員25人が恵庭岳登山の安全と地域開発のために島松沢の石で作った社を山頂に建立した。大きさは高さ80センチ、幅50センチ、「恵庭岳」の文字が刻まれた台座だけで6貫目（22・5キロ）など3つの石、総重量約70キロを交代で担ぎ上げた。建立から49年を経た51年6月13日、一年繰り上げた五十年祭と第1回山開きが催

されている。

登山ルートは、夏道と呼ばれているポロピナイルートが一般的で、昭和6年発行の『北海道の山岳』で「登山口は地図標高二六〇米記入付近で、ここから立派な登山路があり、中腹に休憩小屋もある」などと紹介している。国立公園指定直後の24年9月に発行された千歳観光協会の冊子『観光の千歳　国立公園の支笏湖』でも、ほぼ同様の紹介が載せられている。このほか33年4月に滝沢、37年6月に西沢の両ルートが苫小牧山岳会によって踏破されている。

恵庭岳山頂は、溶岩ドームが崩れた高さ約50㍍の岩塔の上にある。この岩塔の崩落が記録に残されているのは、平成5年7月の北海道南西沖地震直後が最初で、岩塔北西面の中腹から縦横10㍍ほどの岩盤が登山道に崩れ落ちた。13年には千歳市山岳遭難救助隊が東面の崩壊が進んでいることを報告した。このため千歳市、千歳警察署、石狩森林管理署など関係機関は第二見晴台（標高約１２００㍍付近）から上の登山禁止を打ち出したが、多くの抗議を受けて「禁止」から「自粛要請」になった。恵庭岳に登山者名簿が設置された時期ははっきりしないが、当初はポロピナイと滝沢の2ルートだけで、後に西沢にも設置された。各ルートを合わせた名簿記入者数は平成15年度６０１４人、18年度５６７２人、22年度５７３８人、25年度６３４１人。

樽前山

樽前山（１０４１㍍）の活動は約９０００年前に始まり、休止期を経て約２５００年前に再開した。その後再び休止期に入り、寛文7（１６６７）年に最大規模の噴火を起こしている。72年後の元文4（１７３９）年に再び大噴火を起こして大量の火山灰を降らせ、火砕流や火砕サージを発生させている。その後も大きな噴火が続き、明治42（１９０９）年4月17～19日の噴火では現在の溶岩ドーム（溶岩円頂丘、S42・3北海道天然記念物指定）が誕生している。最近では、昭和53（１９７８）年5月から56年2月にかけて小規模な活動が続き、山頂から山腹にかけて降灰が見られた。

山名の原名は「オフイ・ヌプリ（燃える・山）」。『苫小牧市史上巻』によると「タオロマイ（高岸・ある・もの）」が訛って「タロマイ」になり、樽前の漢字があてられた。樽前川のことで、和人がその水源となる山を「樽前山」と呼ぶようになった。

明治11年9月、英国人旅行家イザベラ・バードが樽前山に登り、その記録を１８８０年にロンドンとニューヨークで出版された「Unbeaten tracks in Japan」（邦訳名『日本奥地紀行』）で発表して、樽前山を初めて欧米に紹介した。バードは白老で案内人と馬を雇って外輪山まで登り、慶応3（１８６７）年の噴火でできた古期溶岩ドームが崩壊した明治7年噴火直後の火口原を記録している。

大正期に入ると登山者が増え、早くから登山路が開かれていた苫小牧側では大正12（１９２３）年に樽前山登山案内組合が結成されている。前出の『北海道の山岳』には、支笏湖側が「モラップ」と「シシャモナイ沢」、南側が錦多峰（にしたっぷ）駅（S25～錦岡）からの「覚生沢（おぼっぷさわ）」の3ルートが紹介されている。

昭和3年、昭和天皇即位の御大典を記念して苫小牧の樽前山神社の奥宮が火口原外輪山の南側に造営されている。当時は国有境内地として借地だったが、23年に同神社が売り払いを申請し、24年3月に53円60銭で払い下げられている。31年6月に国が登記し、登記簿によると住所は苫小牧市字樽前４９４で面積は88平方㍍。当初は木造だったが、27年に現在のコンクリート造りになった。

同神社では山開き祭（毎年6月第2日曜日）、山納め祭（10月第1日曜日）

写真４－２　大正から昭和初期に撮影されたシシャモナイ沢の登山風景（谷本亀撮影／支笏湖ビジターセンター所蔵）

を奥宮で行っている。両祭がいつ始まったかは不明だが、28年6月14日付の『苫小牧民報』に山開き祭の登山記事が載せられている。

登山者数が一気に増えたのは、苫小牧市が32年に、29年9月の15号台風（洞爺丸台風）による風倒木処理のために造られた林道を利用して樽前山登山観光道路（現・苫小牧市道樽前観光道路線）を整備してからになる。32年には7合目の登山バス回転場が設けられたが、一般車両の駐車で占められてしまうため駐車場（約1575平方メートル）が造成された。33年には苫小牧市営バスの樽前観光登山バス（支笏湖畔～7合目）が一日3便の運行を始めた。道路整備で観光バスも大挙して押し寄せるようになり、34年秋には苫小牧市交通部のバス乗務員休憩所と一般乗客の待合所を兼ねた苫小牧市営樽前山7合目ヒュッテが建設された

53年5月14日、樽前山が小噴火して山頂付近に降灰があった。このため翌日から7号目以上、23日から全面登山禁止となった。この規制は一部緩和などを交えながら、活動が収まり安全とされた58年6月末まで続けられた。

7合目登山者名簿記入者は、43年度7万1572人、45年度9万4950人、50年度9万9307人、52年度5万933人、54年度は全面登山禁止で記帳なし、60年度4万9077人、平成元（1989）年度4万3960人、10年度3万3919人、20年度1万8292人。

オコタンペ湖

千歳市の『要覧ちとせ』でオコタンペ湖は「支笏洞爺国立公園最大の原始境との折り紙が付けられています」と紹介されている。

湖は約2000年前の恵庭岳噴火で流れ出した溶岩（オコタンペ湖溶岩）によってできた堰止湖で、環境省湖沼調査報告（H5）によると湖面標高599メートル、面積0・4平方キロメートル、湖岸線延長3・8キロメートル。支笏洞爺国立公園が指定された4年後の昭和28（1953）年9月22日に、オコタンペ湖地区（750ヘクタール）が特別保護地区、その周囲の漁岳オコタンペ地区（2538ヘクタール）が特別地域に指定されている。長見義三の『ちとせ地名散歩』（1976年）によると、オコタンペ（オ・コタン・ヌン・ペ）は「川口に・村・の在る・もの」の意で、オコタンペ湖は「オコタンヌンペ・トウ（湖）」で、川（オコタンペ川）の上流にある湖を指すという。

同湖一帯は大正期から原始の森に囲まれた秘境として知られ、国立公園指定後は新たな観光素材として注目を浴びるようになった。30年7月には苫小牧民報が「秘境オコタンペ」と題して、同社主催の「オコタンペ湖探勝会」の様子や自然を連載と特集記事で紹介している。当時、同湖への道はオコタンペ川右岸の道を登る以外になく、同紙では「オコタン湖岸から1時間半の道のり」、湖の西岸は「尺余の芝生がジュウタンのように敷きつめられているその狭い平地の中を数本の〝セセラギ〟が、地底から神がオコタンペ湖のために恵んでくれた清水を運んでいる…」、「日本アルプスの上高地あたりに似た風景である」などと紹介している。

オコタンペ湖地区は特別保護地区として原則的に現状変更行為が認められていないが、その意義への理解は薄く、36年に札幌市が冬季オリンピッ

ク誘致に向けて滑降コースを恵庭岳に内定すると、観光地としての注目が一気に高まった。周辺の道路開発が進む中で37年には支笏湖観光運輸が同湖岸にテント村構想を公表。38年５月３～５日には第15回北海道体育大会登山部門競技大会兼全日本登山大会北海道予選大会が開かれ、約２００人が同湖西岸をベースキャンプに漁岳（１３２８㍍）に登っている。登山者ばかりではなく、北海道立水産孵化場（現・独立行政法人北海道立総合研究機構水産研究本部さけます・内水面水産試験場）が38年７月、ヘリコプターを使ってサケとヒメマスの交配種約３０００匹を空中から放流している。この放流は以後数年間続けられた。

同湖を訪れる人が飛躍的に増えたのは47年２月に開催された札幌オリンピック（第11回オリンピック冬季競技大会）以降になる。オリンピックのために開削された千歳市道支笏湖周辺道路（現・道道支笏湖線）が一般に開放され、登山者だけではなく観光客や釣り人が増えたためで、特に釣り人の増加が大きな問題となった。55年６月13日付の『北海道新聞』で「釣りはできるのか」と取り上げられている。同湖の周りは自然公園法の特別保護地区として動植物の採種は一切禁止されているが、湖は河川法上では「河川」に分類され水産生物についての規制はないため、釣りは原則自由となっている。

この問題に動きが出たのは平成８（１９９６）年４月。林野庁が同湖を含む一帯約３２６０㌶を「漁岳周辺森林生態系保護地域」に指定し、同湖への立ち入り規制を打ち出し、湖に通じる陸地部分を立ち入り禁止とする策が講じられたが、状況は現在も変わっていない。

巨木の森と美笛の滝

巨木の森　美笛地区に最初の植樹用苗畑８１００平方㍍が開設されたのは昭和15（１９４０）年４月。以降拡張が続き、29年９月の台風15号（洞爺丸台風）で支笏湖周辺の森に甚大な被害が出ると、戦後の木材需要も重なり、その必要性は一層増していった。その苗畑拡張過程で択伐後の天然林を残した保護樹林帯（防風林）が巨木の森の原型になる。

45年に美笛地区を所管する苫小牧営林署（現在の所管は石狩森林管理署）が支笏湖周辺の直営伐材事業を打ち切って同地区の新たな活用の検討をはじめ、52年に国設美笛野営場が開設された。この開設に伴い整備された野営場から道道支笏湖線までの連絡道周辺が「巨木の森」と名付けられた。

広さは約８㌶で、開設当時苫小牧営林署が行った調査では胸高直径が１㍍以上の６種類48本の巨木があるとされた。平成15（２００３）年５月には千歳の自然保護協会による調査が行われ、胸高直径が１㍍以上の巨木６種類54本が確認されている。同協会の調査は28～29年にも行われ胸高幹周３㍍以上のカツラやハルニレ、ハリギリ、ミズナラなど８種類69本が確認された。森内の歩道整備も行われたが、青森県十和田市奥入瀬渓流落枝負傷事故の最高裁判決で国と県の管理責任を認めた18年の二審東京高裁判決が確定したため、20年ごろに閉鎖されている。

巨木の森に関する多くの観光案内で「樹齢３００年以上の巨木」とよく書かれているが、筆者が28年７月に管理する石狩森林管理署に問い合わせたところ「管理署の『森林調査簿』では、１００から２００年はあるようだが、３００年以上は記載がない」との回答があった。

美笛の滝　美笛川の支流・ソウオンピプイにある落差約50㍍の滝。『増補』、『ちとせ地名散歩』によると、「ソウオンピプイ」は「滝・に入る・美笛川」で、国土地理院の地形図では「ソウオン美笛川」と記されている。この川が合流する福神沢との合流点近くに昭和13年に開かれた千歳鉱山福神坑があり、由来は不明だが千歳鉱山で働く人たちは「弁天の滝」と呼んでいた。また、国道２７６号美笛峠の旧道時代に、峠の下り途中にこの滝

が見えたことから「見かえりの滝」とも呼ばれたという。

美笛の滝が観光地として注目されるようになったのは巨木の森同様に52年に国設美笛野営場が開設されたころからで、所管する苫小牧営林署（現在の所管は石狩森林管理署）が歩道の整備を始めたのは50年代中ごろになる。

長見義三は『ちとせ地名散歩』（１９７６年）の取材のため川伝いにこの滝を訪れている。56年８月に連載された『苫小牧民報』の「滝・涼を求めて」でも林道は途中までで「ゴロ石を飛びながら流れをさかのぼる」と記されている。歩道がきちんと整備されたのは60年ごろで、訪れる人の増加を受けて苫小牧営林署が64年９月に国有林内の名所として高さ１８０センチの立て看板を設置している。

歩道は、大雨により途中の小さな沢で出水が起きるたびに通行止めや補修が繰り返されていたが、平成26（２０１４）年９月９日から12日の豪雨で市道福神道路からの連絡道路と橋が流され閉鎖状態となっている。

苔の洞門

苔の洞門は支笏湖の南側、支寒内地区の東側にある涸れ沢（通称・苔の洞門沢）の一部。同地区は、千歳市街地に１トル近い降下軽石を積もらせた元文４（１７３９）年７月の樽前山大噴火の火砕流堆積物によって形作られた。

国道２７６号から涸れ沢を約７５０メートル遡ると、岩壁に囲まれた函状の沢が出現する。函状地形は火砕流堆積物が冷却した後、土石流による浸食によってできたと考えられており、下流部の約４００メートル区間（第１洞門）と、その上流側出口から約３００メートル上流の約６００メートル区間（第２洞門）に分かれている。ともに沢底幅が数メートルと狭く、両岸は高さ５メートルから12メートルの切り立った岩壁に囲まれ、コケ（蘚苔類）が密生している。切り立った岩壁一面を覆った蘚苔類群落が特異な景観となっており、平成26（２０１４）年８月に日本蘚苔類学会から「日本の貴重なコケの森」に選定されている。

苔の洞門の沢については、長見義三が著書『ちとせ地名散歩』（１９７６年）の中で、アイヌ語で「チセ（イ）オマピナイ＝家の形をしている水の流れていない沢」としながらも「ニセイ・オマ・ピナイ＝両岸絶壁のある涸れ沢」が誤聞された可能性があると指摘している。この沢は大正時代から樽前山への登山道として利用され、当時の登山案内書などで「唐沢」とよばれていた。

千歳市が唐沢の観光的価値を認識し、本格的な調査に乗り出したのは昭和43（１９６８）年ごろだった。同年10月20日の『苫小牧民報』に「観光的価値は、へたな鍾乳洞の比ではなく、スケールも大きいほか、支笏湖畔ということで、売り出せばパッと人気が出ることは確実」などと市事業部の見解が載っている。「苔の洞門」の名称が観光パンフレットに初めて使われたのも同年度で、千歳市発行の観光パンフレット『ちとせと支笏湖』に「支寒内涸沢にある苔の洞門」として紹介されている。

写真４－３　大正から昭和初期に撮影された唐沢（谷本亀撮影／支笏湖ビジターセンター所蔵）

観光地として名前が知れるにつれ、観光客は急増。樽前山噴火の影響で53年６月から58年６月の間、苔の洞門を含むシシャモナイからの樽前山登山道は入山を規制されたが、解禁された58年７月以降は再び増え、その管理と保護対策が急務とされた。管理と保護対策で最も問題になったのは、国立公園は環境庁、土地は林野庁、行政区域は千歳市とそれぞれ管理体制が違っていたことで、そのため千歳市の呼びかけで管理の一元化を目的とした「苔の洞門運営協議会」が59年３月19日に設立された。メンバーは千歳市、環境庁、苫小牧営林署、自然公園美化管理財団（現自然公園財団）、千歳観光連盟、千歳文化財保護協会の６団体。初会合では①開放期間を６月１日から10月31日までの４ヵ月間　②監視所を設けて、開放期間中は監視員１人が常駐し日曜日・祝日には３人体制で監視と観光案内を行う―などの事業計画を決めている。この年の観光客は９万４０００人。60年には15万８０００人、平成元年には最高の18万１０００人に達した。

観光地としての名声は上がっているが、肝心のコケ（蘚苔類）については調査が遅れ、昭和53年になって環境庁の依頼で北海道立教育研究所所長の斎藤實が『苔の洞門における蘚苔類の生息調査報告』をまとめ、蘚類30種、苔類５種を報告している。平成23年度、24年度に環境省の調査が行われ蘚類57種、苔類26種の合わせて83種と報告された。

13年６月５日、第１洞門下流側入り口から約70メートル付近右岸の高さ約８メートルの岩壁上部が崩落して全面閉鎖となった。翌年７月に入口に観覧台を設けて洞門内を覗き見る暫定開放となったが、26年９月９日から12日の豪雨で観覧台付近の左岸側壁が大きく崩れた。観覧台のほか遊歩道などの施設も被害を受け、以後全面閉鎖が続いている。

表４－１　支笏湖周辺ヒグマ捕獲（S44.4～）

年月日	場　　所	性別	推定年齢
S44.４.11	恵庭岳北面		
４.15	風不死岳南面		
８.29	千歳川右岸王子製紙第一、第二発電所間	雌	4～5
12.３	美笛762P南斜面		
S45.４.23	草笛川中流部		
５.３	滝ノ上山東面		
S46.３.28	恵庭岳南西面		
４.５～20	紋別岳東斜面	雌	1
	イチャンコッペ山周辺		
４.13	オコタンペ湖西側扇状地	雌	9
		雌	2
		雌	2
S47.４.１	樽前山932Ｐ北西面	雌	4
９.23	美笛川右岸河口近く	雄	4
S48.４.21	美笛川上流部、丹鳴岳西面	雌	5
９.18	美笛川右岸河口近く	雌	8
S49.４.21	美笛川左岸、483Ｐ南側	雌	4
S50.４.３	風不死岳北東面	雌	8
S51.４.４	風不死岳北東面	雄	8
４.６	トイシ沢最上流部	雌	8
６.９	風不死岳北西面	雌	2.5
S52.４.24	丹鳴川上流	雌	8
		雌	3
S53.４.22	草笛川最上流部	雄	15
S54.３.29	風不死岳北西面	雄	5
S55.３.19	風不死岳東面	雌	5
５.１	美笛川中流部、千歳鉱山より上流	雌	4
S56.４.８	草笛川最上流部	雄	7
４.13	丹鳴川右岸尾根	雄	8
S57.４.７	風不死岳西面	雄	5
S59.４.４	風不死岳北面	雌	12
		雌	3
S61.４.14	モラップ一、二の沢上部	雄	12

合計28件　33頭　　※千歳市ヒグマ捕獲位置図より作成。

支笏湖地域のヒグマ

捕獲　北海道のヒグマ分布は、大きく渡島半島、積丹・恵庭、天塩・増毛、道東・宗谷、日高・夕張の５個体群に分けられ、千歳市・支笏湖地域は積丹・恵庭地域に属している。この地域の個体群は、開発による分布域の減少と他地域からの孤立化が進み生息数の減少が著しいとされ、環境省の『日本版レッドデータブック』（１９９１年）では「保護に留意すべき

個体群」とされている。北海道がまとめた『ヒグマ生息数の推定』（２０１５年）によると、平成24（２０１２）年度の全道の推定生息数は１万６００頭±６７００頭で、このうち支笏湖を含む積丹・恵庭地域の推定数は８００頭±６００頭としており、２年度の推定数３００頭±２００頭に比べ増加しているという。

このように、千歳市内、近隣市域を含む支笏湖地域についての生息実態はほとんど分かっていない。記録をたどれるのは捕獲数で、千歳市の記録に出てくる捕獲は姉崎等が昭和44（１９６９）年４月に恵庭岳北面で捕獲した１頭（性別等不明）から、以後平成27年９月の泉沢地区（雌、推定３歳）まで39件45頭。このうち28件33頭が王子製紙千歳川第一発電所付近以西の支笏湖地域となっている。

支笏湖地域を地区別（表４－１）にみると、捕獲場所別で最も多いのが風不死岳周辺で９件10頭、次いで美笛川本流・支流域を含む美笛地区の６件６頭、美笛地区に隣接する丹鳴川流域の３件４頭の順。月別にみると、４月が最も多く23頭、次いで３月の３頭。５月と９月が２頭ずつとなっている。春グマ捕獲時期の３月、４月で同地区全捕獲数の78・８パーセントを占めている。捕獲は千歳市内のハンターで構成する千歳市クマ駆除対策本部（現千歳市クマ防除隊）など市の要請を受けて出動する公的団体によるものが４件４頭で、残る24件29頭が狩猟となる。

人身事故　新聞報道や手記、公的記録で分かっている市内のヒグマによる人身（死亡）事故は４件で、最も古いものは昭和14（１９３９）年ごろに蘭越で女性（18歳）が犠牲になった事件、次いで28年９月20日、王子製紙第一発電所社宅に住んでいた男性（67歳）が、近くの山林にまき割に出かけたまま帰らず、息子２人が迎えに行ったところ遺体を発見した。以上の２件は襲ったヒグマの行方など詳細は不明。

次いで44年８月28日で「老婆事件」と呼ばれている。事件を伝える千歳民報によると、王子製紙第一発電所社宅に住む女性（78歳）が、28日午後４時半ごろイチゴ摘みに出かけたまま帰らないと、家族が千歳警察署支笏湖駐在所に連絡。同署では署員20人と千歳猟友会のハンターで構成する千歳市クマ駆除対策本部員とともに急行して探したところ、午後11時15分ごろ、第一発電所から約１７０メートル千歳寄り高圧線下の草むらで血まみれの衣類と手ぬぐいを発見した。翌日午前４時から捜索を再開し、衣類を発見した近くで枯葉と砂がかけられていた遺体を発見した。約30メートル離れた林の中に隠れていたヒグマを発見し午前５時40分に射殺した。仔グマがいた痕跡があったため付近の調査が行われたが発見できなかった。４、５歳のメスで、体重１５０キロ。この事件は、吉村昭著『熊撃ち』（１９７９年）の題材になった。

51年６月４日から９日にかけて発生したのが「風不死事件」と呼ばれ、２人が死亡し３人が重傷を負った。

『千歳民報』などによると、６月４日午後に風不死岳の中腹でネマガリダケの伐採作業をしていた青森県八戸市の作業員の男性（56歳）がヒグマに襲われ、左足を引っかかれて重症。５日にはタケノコ採りをしていた苫小牧市の男性（53歳）が背後から襲われ、腰から左太腿にかけて引っかかれて重症を負った。

２日連続の人身事故発生に千歳市や千歳警察署では現場周辺や国道２７６号沿いに職員や署員を出して山菜採りでの入山禁止を指導した。

ところが９日午後、入山禁止を無視してタケノコ採りに入山した11人グループのうち栗山町の男性（54歳）、同町の男性（26歳）、岩見沢市の男性（58歳）の３人が下山予定の正午になっても戻らないため、グループの２人が山に入ったところ、国道２７６号から約１５０メートル奥でヒグマに襲わ

れた1人が血だらけになって倒れているのを発見し１１０番通報した。襲われた男性は千歳市内の病院に収容された。頭と両足をツメに引っかかれ、出血多量で重体だったが一命を取りとめた。

通報を受けた千歳警察署員、市クマ駆除対策本部のハンターが現場に急行し残る2人を捜索した。午後3時40分ごろ、最初に発見された男性が倒れていた所で襲ったクマと出遭いハンターが15発を発砲して射殺した。2人目は間もなく遺体で発見され、残る1人も午後5時前に遺体で発見された。いずれも襲い方などから同じ個体によるものとみられている。2歳5ヵ月の雌で、剥製にされ北海道博物館に保管されている。

事件後、千歳と苫小牧の両市は当面、樽前山と風不死岳の登山禁止措置をとり、8月3日に開かれた両市のクマ駆除連絡会議で風不死岳の全面禁止、樽前山については7合目まで車以外での通行は禁止することを決めている。この処置は、一部のルートを除いて千歳市は10月には解除、苫小牧市は翌52年6月まで継続した。

参考文献

長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞社１９７６年／門崎充昭・犬飼哲夫『北海道の自然　ヒグマ』北海道新聞社１９８７年／門崎充昭『野生動物痕跡学辞典』北海道出版企画センター１９９６年／金坂清則『完訳日本奥地紀行３』２０１２年／環境省『湖沼調査報告』１９９３年／環境省北海道環境事務所『平成23年度苔の洞門周辺地域保全のあり方調査（管理方針検討）委託業務報告書』２０１２年、２０１３年／気象庁「日本活火山総覧（第４版）Ｗｅｂ掲載版／佐々木昌治『樽前山麓の森林』２００５年／札幌山岳クラブ『北海道の山々』１９６０年、『マウンテン・ガイドブックシリーズ39　北海道の山々』１９６０年／支笏湖関連各種パンフレット／支笏湖の水とチップの会『支笏湖の人と自然』２００７年／自然公園財団『パークガイド　支笏洞爺国立公園　支笏湖』２００８年／地蔵慶護『武四郎のタルマエ越え』みやま書房１９９１年、『北海道身近な歴史紀行』北海道新聞社１９９９年／高橋長助『国立公園支笏湖沿革史　百年の支笏湖歌入物語』１９７４年、『あなたを待つ支笏湖』１９７２年／千歳観光協会『観光の千歳　国立公園の支笏湖』１９４９年／千歳観光協会・苫小牧観光協会『涼風は招くよ観光支笏へ　支笏湖案内図』１９５２年ごろ／千歳山岳会『創立50周年記念誌シコツの山脈』２００６年／千歳市『千歳市史』１９６９年、『増補千歳市史』１９８３年、『志古津』各号、『要覧ちとせ』各年／千歳支笏湖保勝会『観光地支笏湖案内　支笏湖を行く』１９４７年／苫小牧山岳会『創立50周年記念誌　ぽろしり』２００４年／苫小牧市『苫小牧市史』上巻　１９７５年、『苫小牧市史』下巻　１９７６年／とましん郷土文庫『風不死岳、恵庭岳』２０１５年／日本自然保護協会『支笏湖の自然観察』１９８２年／日本電信電話公社札幌無線通信部『北海道無線史』１９７９年／編集代表田中三晴『北海道の山岳』晴林堂　１９３１年／北海道森林管理局各種パンフレット／北海道立水産孵化場『魚と卵　１０１号』１９６３年、『同１０４号』１９６４年／宮坂省吾『イザベラバードの見た樽前山』２０１５年／『千歳民報』／『苫小牧民報』／『北海道新聞』

第３項　支笏湖の観光

山線鉄橋

山線鉄橋は、もともと明治32（１８９９）年に、北海道官設鉄道上川線（空知太～旭川）の砂川－妹背牛間に「第一空知川橋梁」として架設されたが、設計荷重が小型機関車であったため同線の輸送量増大により大正12（１９２３）年ごろ新しい橋に架け替えられ王子製紙に払い下げられた。橋は長さ64㍍、主要構間隔5㍍。英国人技師・ポーナルの設計によるピン構造ダブルワーレントラスと呼ばれる三角形を基本構造とする橋で、当時

多くの鉄橋に練鉄が用いられる中、初めて主要部分に鋼が使われていた。

同社は、明治41年から運行された王子製紙苫小牧工場専用鉄道（＝王子軽便鉄道　通称・山線）で支笏湖の千歳川呑口に架けられて「湖畔橋梁」と呼ばれていた木製ワーレントラス橋に替えて移設した。昭和26（１９５１）年５月の同線廃止後は線路を取り除き車両を通行させていた。

山線廃止後、鉄橋は支笏湖のシンボルとして地元はもとより観光客に親しまれてきたが、王子製紙では維持管理などに経費がかさむことから撤去を検討。一方、国立公園を管理する厚生省と道は観光資源として役立つほか、橋がモラップ地区への通行路になっていたため存続と千歳市への寄付を働きかけていた。このため王子製紙は市への寄付を決め、42年５月16日に開かれたホテル翠明閣改装披露パーティーの席上、贈呈式が行われた。

千歳市は、腐食など橋の傷みが目立ち始めた61年に耐久度調査を実施した。その結果、現状のまま使用できるのは平成３（１９９１）年ごろまでとされ、塗装、補修、新設の３案を検討した。これに対し地元や市民などから「支笏湖の歴史的遺産」としての存続要望が強く出された。これを受けて市は５年に復元保存を決定。「現地で原型保存、生涯現役」を基本思想に７年度から３ヵ年度、約４億円をかけて、解体修復を行った。工事は横河メンテック（現・横河ブリッジ、千葉県）が施工。腐食の激しい下弦材付近の部材はスクラップとし全体の約45㌫を再利用、また現在使われていない当時のリベット締め工法を行うなど、本来の姿を保つ最大限の努力が行われた。

生まれ変わった橋の開通式は９年11月22日に催された。名称もそれまでの「湖畔橋」から新たに「山線鉄橋」とされた。11年８月22日には道内で使われている最古の鉄橋として千歳市有形文化財に指定。19年11月30日には「洋紙の国内自給を目指し北海道へと展開した製紙業の歩みを物語る近代化産業遺産群」として経済産業省の近代産業遺産に認定された。

なお、道内に現存する最古の鉄橋は、明治17年、岩見沢に架橋された幌内鉄道トラス橋で、現在岩見沢市内に分解して保管されている。さらに平成30年11月16日には、歴史的土木施設として価値のあることから、公益社団法人土木学会より平成30年度土木学会選奨土木遺産に認定された。

王子製紙千歳川第一発電所

明治43（１９１０）年９月に操業を開始した王子製紙㈱苫小牧工場に電力を供給するために、同年６月千歳川呑口から約６㌔下流の千歳川渓谷（現・水明郷）に竣工した。支笏湖を自然の貯水池として呑口から約１㌔下流に堰堤を設けて取水し、約４・３㌔の隧道と管路で同発電所構内の貯水池に入り、水圧管（送水管）で発電所に送水される。落差は１３０㍍。送水管は当初４本だったが、その後６本にされた。現在は４本。

同社は、同発電所を含め昭和16（１９４１）年までに同流域に合わせて５ヵ所の発電所を建設している。これらは「千歳川の王子製紙水力発電施設群」として平成19（２００７）年に「北海道における水力電力開発黎明期を代表する現役稼働の水力発電施設群。新聞用紙等の国産供給力の質と量の飛躍的向上を支えた」として土木学会選奨土木遺産と、経済産業省の近代化遺産に選定されている。なお、千歳発電所から供給される電力の周波数は北海道電力の50㌹と異なり西日本と同じ60㌹。同発電所建設時に導入されたアメリカ製発電機が60㌹だったためで、配電される同社苫小牧工場と社宅街、支笏湖温泉地区は現在も60㌹となっている。余談になるが、昭和40年代に入って家電機器が両周波数に対応するようになるまで、支笏湖温泉地区の住民が電球や電気製品を購入する時は苫小牧市内の専用の電気店に行かねばならなかった。

各発電所への立ち入りは禁止されているが、第一発電所については敷地

内の水圧管頭部に設けられた展望台が開放されており、建設当時のレンガ造りの建物と４本の水圧管が１３０㍍の落差とともに見ることができる。また、展望台正面に広がる台地は、４万年前の支笏火山大規模噴火の噴出物が厚く積もった火砕流台地で、日本地質学会北海道支部による「北海道地質百選」の候補地にもなっている。

サクラの名所としても知られている。同発電所構内や周囲の国有林、展望台から望む渓谷の谷筋には多くのサクラがあって、５月には一斉に花を咲かせる。戦前から発電所関係者のほか湖畔（現・支笏湖温泉）の住民も花見に訪れていたという。

昭和26年５月に王子軽便鉄道（山線）が廃止されてからも花見の賑わいは変わらず続いていた。49年６月に発電所勤務者が苫小牧からの通勤となって以降も同様で、マイカーの普及もあって千歳や苫小牧ばかりではなく札幌などからも多くの人が訪れるようになった。王子製紙苫小牧工場が57年５月にまとめた「水溜公園観桜・人・車対策」では、現在のゲート前広場をはじめ旧水明小学校グラウンド、社宅跡地などを臨時駐車場にして約３５０台分のスペースを確保し、交通整理員８人のほか立ち入り禁止区域パトロール員３人を配置している。ジンギスカン鍋も盛んに行われたようで、火気使用場所や炭火禁止場所も指定している。

遊覧船

昭和12（１９３７）年に始まった日中戦争戦時体制下による燃料不足のため、第１、第２観光丸で遊覧船事業を行っていた三〇通船部が経営を止めてから、戦後の21年に高橋長助が釣り船12隻を新造して貸し船業を始めるまでの間、中村組（後に菱中興業㈱、現・菱中建設㈱）の釣り船が数隻あっただけという。

21年の仮称「道南」国立公園指定促進期成会の設立、23年６月の米国国立公園局チャールス・リッチーによる国立公園指定調査によって支笏湖、洞爺湖地域の国立公園指定に向けた機運が高まる中、高橋長助が21年に貸し船業を始めると、23年ごろから小村開三、小野寺寿、貫田剛吉、菱中興業菱中通船部、山森三郎、加藤喜久、岡部六郎、八木勝男、佐々木広見らが湖畔で貸し船や遊覧船の営業を相次いで始めた。

27年ごろに発行された苫小牧観光協会と千歳観光協会の『涼風は招くよ観光支笏へ　支笏湖案内図』には、翠明閣から湖岸沿いに南（千歳川呑口）に向かって翠明閣舟付、岡部ボート店、山森ボート店、八木船舶、丸駒定期船、小野寺船舶、伊藤船舶、貫田ボート、菱中興業舟付所、小林ボート、遊覧船会社舟付と11事業社（者）の桟橋が並んでいる。

30年当時の遊覧船と事業社（者）は、菱中通船部が清和丸（定員50人）とはやぶさ丸（同16人）、支笏湖遊覧船が第１つばめ丸（同36人）と第２つばめ丸（同24人）、八木勝男が第１千鳥丸（同22人）と第２千鳥丸（同17人）、小村開三がかつら丸（同20人）、小野寺寿がつばさ丸（同７人）、佐々木広見が丸駒丸（同38人）、山田金次郎がモーラップ丸（同34人）。貸しボートは各事業社（者）合わせて２３７隻を数えた。

観光客は増加しているとはいえ遊覧船事業者が過剰で、各遊覧船が客を奪い合う状態となっていた。このため、厚生省の国立公園管理

写真４－４　菱中通船の「清和丸」（宮林廣撮影／S28頃）

員（現・環境省自然保護官＝レンジャー）の要請もあり、30年に千歳町の指導のもとで業者が統合して支笏湖観光船企業組合を設立した。桟橋の統合も行われ、支笏湖観光船企業組合と同企業組合に参加しなかった菱中通船部の2桟橋となった。同年、同企業組合は道の補助金を受けて室蘭港の貨物船を購入。支笏湖で改造して大型遊覧船「ゑにわ丸」（20ﾄﾝ）として就航させた。

同企業組合は33年に支笏湖企業船組合となった後、35年に全事業を北海道不動産㈱（後に北炭観光開発㈱－三井観光開発㈱－㈱グランビスタ ホテル＆リゾートと社名を変更）に譲渡した。北海道不動産は遊覧船部門を独立させ支笏湖観光運輸㈱を設立している。

菱中通船部は35年6月、１０００万円をかけて室蘭で建造した遊覧船「みどり丸」（定員85人、30ﾄﾝ）が完成して第1洋和丸とともに2隻体制となったが、36年に一切を支笏湖観光運輸に譲渡して廃業した。一社体制となった支笏湖観光運輸は、36年7月に横浜で建造した乗客２２２人が乗れる「美笛丸」（54ﾄﾝ）を就航させている。札幌オリンピック（第11回オリンピック冬季競技大会）を翌年に控えた46年には、同社は滑降コース会場がある奥潭へ観戦者を輸送するために「恵庭丸」（定員２２６人）を進水させ、同社の遊覧船は「美笛丸」、「みどり丸」（同85人）、「白銀丸」（同50人）、「第1樽前丸」（同32人）の5隻体制となった。

平成15（２００３）年11月、加森観光㈱（本社・札幌）が支笏湖観光運輸の全株式を取得して遊覧船事業に進出した。同社は16年に静岡県の観光遊覧船会社から船底の窓から湖の中を観察できる水中観光船2隻を購入して苫小牧港に回航し、支笏湖温泉まで陸送を行った。定員50人の「エメラルド」（18ﾄﾝ、）と「サファイア」（17ﾄﾝ）で、翌17年4月10日の湖水開きから営業運航を行っている。

ヒメマス釣り

釣り規制　支笏湖のヒメマスは、明治27（１８９４）年に阿寒湖から天然卵を移入し31年に初めての親魚捕獲が行われてから、39年に北海道庁令で釣り以外の漁法が禁止されるまで特に規制はなかった。その後、大正4（１９１５）年の北海道漁業取締規則の改正で支笏湖が保護河川湖沼に加えられてから魚網など網漁具の使用が周年で禁止されて、釣り以外は一切許されないことになった。

昭和に入ると、ヒメマス人気の高まりに加え苫小牧や千歳からの交通の便が良くなって釣り人が増加したことから、昭和11（１９３６）年に禁漁とされ、湖畔と丸駒両地区にのみ解禁区域が設けられ、6～9月の解禁期間が設定されている。この規制は戦後の27年に解禁期間が6～8月に短くされるとともに美笛鉱山の住民に配慮して美笛川河口部が解禁区域に加えられている。36年には、釣り人の増加に加え美笛川河口部との境界が不明確だったオコタンペ川河口部が新たに解禁区域に加えられた。39年に北海道内水面漁業調整規則が制定され、その中で解禁区域が初めて図示されている。現在のように禁止区域が紋別岳、風不死岳、多峰古峰山、奥潭の大崎、オコタン崎を結ぶ線で明確になったのは47年の同規則改正による。この改正では夜釣りが禁止され、釣りを禁止する時間は6月が午後7時～午前3時、7月が午後7時～午前3時30分、8月が午後7時～午前4時までとされた。これらの規制の背景には、支笏湖のヒメマス増殖事業は国営事業として行われ国内では唯一漁業権のない湖となっており、種苗湖という位置づけから積極的にその維持増殖を図らなければならないものの、釣り人の増加や漁網による密漁の横行など、乱獲による資源の減少が常に大きな問題となっていたことがある。

49年には尾ぐされ病が発生し大きな危機に直面した。このため、50年に

道内水面漁場管理委員会がヒメマスの解禁期間（6～8月）中の全面禁漁を指示。51年に6、7月を解禁、52年には6～8月を解禁したが、尾ぐされ病の再発で53年は6月のみ解禁。54年は6～8月を全面禁漁としたが改善は見られず、55、56年の6～8月に全魚種採捕禁止を指示している。57年にやっと禁漁を解除し、合わせて撒き餌・寄せ餌の禁止、竿数を一人2本に制限している。

平成18（２００６）年には、湖の環境保全を目的にした環境省の公園計画変更で動力船の乗り入れ規制が行われ、漁船、河川管理船、旅客遊覧船などを適用除外、特例をヒメマス解禁期間中の承認釣り船として、持ち込みレジャー用小型船舶（プレジャーボート）は全面禁止となった。

地元のヒメマス確保　釣りが一般的になり釣り人が増加した昭和10年から17年を「チップ（ヒメマス）釣りの黄金時代」と呼んでいる。大型のヒメマスが自由にいくらでも釣れた時代だった。しかし、戦時中に食糧増産を目的にした放流数の極端な増加によって、戦後は魚体の小型化が大きな問題となっていた。一方、支笏湖の観光地化が進むほどにヒメマスは単なる食糧から重要な観光資源として注目されるようになった。しかし、釣られたヒメマスの多くは札幌など支笏湖以外に流れており価格の変動も大きく、支笏湖の旅館や食堂は安定した入手ルートの構築を求めていた。

このため支笏洞爺国立公園指定を目前にした23年10月、人工孵化事業への協力、密漁防止を行うとともに採捕した不用親魚の払い下げを受ける「姫鱒孵化事業協力会」が設立され、38年には市が申請して解禁期間中に刺網でヒメマスを採捕する水産庁特別採捕委託事業（特採）が始められた。市が委託を受け、資源量調査で採捕したヒメマスを同会が地元に配分する仕組みで、得られた資金は密漁監視などの同会の活動に使われた。特採は、56年に設立された支笏湖漁業組合に引き継がれ60年まで続けられた。

余談になるが、尾ぐされ病が続いた昭和49年から56年にも採卵用の親魚採捕は続けられていた。そこで問題になったのが地元に払い下げられていた不用親魚の安全性。50年の採捕は2万８０００尾余りで、そのうち不用雄1万２０００尾余りの払い下げが予定されたが、北海道の異議で冷凍保管となった。食用の可否は地元観光業者にとって死活問題だけに、北海道衛生研究所が調査を行い51年2月になって「動物実験で見る限り無害」との報告をまとめた。これを受けて4月に市、支笏湖ひめます保護協力会（S35に姫鱒孵化事業協力会から改称）、北海道さけ・ます増殖事業協会の3者による入札が行われ、協力会が例年の2倍以上にあたるキロ当たり３９０円、総額95万40円で落札している。

釣り人　昭和30年代に入ると、解禁中の合法的な釣りも遊漁とかけ離れた状況で釣りが事業化、プロ化し、さらに刺網による密漁も横行していた。34年7月27日付の『苫小牧民報』には、「横行する集団密漁」との見出しとともに「ざっと十数組が入り込んで禁止の刺網を使い、チップを大量に密漁している」と載っている。『支笏湖ヒメマス移植１００年・養殖ヒメマス出荷10周年記念誌・千歳と姫鱒』（１９９３年）には、密漁で押収された刺網数が30年57枚、32年１１４枚、34年１７２枚、36年１７６枚とあり、36年12月4日付の『苫小牧民報』には「密漁の横行で採卵用のヒメマスが目標のわずか10％」と報じられている。

写真４－５　ヒメマス釣り（S39.6）

一般の釣り人も激増し、37年６月18日付の『苫小牧民報』には「平日で約７００人、土日曜日は１０００人を超える」とともに「ボート難に付け込んだダフ屋横行」の記事が載せられている。

市などが発表した解禁初日のボート数や釣り人数は39年がボート３００隻以上、釣り人３０００人、43年はボート約１３００隻、47年はボート約１５００隻と増え続け、秋に尾ぐされ病が発生した49年にはボート約２４００隻、釣り人４４５０人となっている。

資源の減少が深刻化する中、53年４月に市はプロを締め出し健全な釣りを取り戻すために千歳市は水産庁北海道さけ・ますふ化場千歳支場や苫小牧営林署、小樽海運局、環境庁、千歳警察署、北海道、石狩支庁などと「支笏湖ヒメマス釣魚対策協議会」を発足させ、釣り用ボート置場９ヵ所指定とボートの登録、ボート整理料徴収などの規制を決め、５月には毎年当たり前のように行われていたボート置場確保のための湖岸の勝手な縄張りの撤去を行っている。

60年代に入ると、不漁に魚体の小型化が加わって釣り人が激減している。60年の解禁初日に６００隻だったボートが、63年には30隻、平成元（１９８９）年には24隻、４年には18隻、６年には16隻まで減っている。資源の減少が深刻化する中、２年から市と支笏湖漁業組合による釣獲調査が始まっている。同じような調査は支笏湖姫鱒孵化事業協力会などにより昭和29年から35年まで行われたが、その信頼度は低かった。新たな釣獲調査は、ボート事業者と釣りグループなどの協力を得て指定ボート置き場から出漁する船釣りを対象に聞き取りで集計している。３年度の集計は９１３尾、５年度には１３４尾まで落ち込んだが、以降は回復傾向となり12年度は１万３０１尾、20年度には６万８０３５尾、26年度は15万８７４１尾まで増加した。

湖畔商店街

厚生省は昭和24（１９４９）年５月に支笏洞爺国立公園の指定を行ったものの、支笏湖地区のほとんどが林野庁の所管地だった。林野庁からの所管替えで湖畔地区の約35ヘクタールが厚生省所管地になることが決まり、集団施設地区の位置づけが行われ、一般計画が示されたのは27年10月13日だった（S32・10・1区域指定）。これを受けて28年度に国立公園管理員（現・自然保護官＝レンジャー）が配置された。

初代管理員の宮林廣は、当時の様子を「湖畔に小さな町があっただけ。そこにしたって人口は１００人程度。小さい観光地みたいなものがあっただけで、周囲は非常に漠然とした湖が広がっていて両側に山があるだけ」。商店街については「お粗末な桟橋が14、15本あって、それから屋台のアイスクリーム屋や売店、食べ物屋、売店みたいなものが出ていたし、食堂とか土産品店とかバラックみたいのが７～８軒あったのかな」と手記に残している。

27年ごろ発行された苫小牧観光協会と千歳観光協会の『涼風は招くよ観光支笏へ　支笏湖案内図』には、現在の商店区に寿天金、堤商店、丸駒食堂、山森休所、支笏荘、売店、湖岸の桟橋一帯には白樺食堂、谷本商店、簡易食堂、遊覧船会社舟付売店、小野寺船舶売店、川沿いには高藤アイスキャンディーの12店が載っている。

集団施設地区は「展望やピクニックの園地、バス発着場や駐車場などの公共施設、ホテルやユースホステルなどの宿泊施設、食堂・売店などの便益施設、地域住民の居住施設などを、一定の地割りにもとづいて計画的に整備する」（パークガイド『支笏湖』）地区で、湖畔地区では湖岸部分は船やボート関連施設のみで、それ以外の宿泊、飲食店、土産物屋などは千歳川左岸台地上とされた。売店区は現在のしこつ湖鶴雅リゾートスパ水の謌

（旧・支笏湖観光ホテル）の南側とされ、各店舗の移設は28年に入ってから厚生省や道庁など行政機関の強力な指導によって進められた。29年には林野庁から厚生省への湖畔集団施設地区の所管替えが行われている。

湖岸や河岸の商店の移設は順調に進み、31年には一挙に土産物店など5店舗が新築されている。このうち「待合まつや」など数軒の建設には、24年に米軍がレーダー基地建設を進めたものの朝鮮戦争勃発で中止されたイチャンコッペ山山頂のレーダー基地建設資材が使われている。

移設は32年ごろにはほぼ終了し、33年ごろ発行された『国立公園支笏洞爺　千歳市　支笏湖　案内』をみると、売店区には碧水荘（福永）、藤よし、待合まつや（食事と休憩）、三〇谷（さんまる）本商店（貸テント、菓子類、酒類、土産品、ビール、サイダー）、食堂白樺（食堂喫茶白樺荘）、支笏荘（福士）、千歳食堂、丸駒食堂、福永、八木、丸駒温泉連絡所の11店が載せられている。

46年に千歳市が発行した冊子『国立公園　秘境支笏湖』の商店街案内図には福永物産、藤よし、まつ屋、白ふくろう、すずらん堂、湖月荘、丸駒温泉連絡所、おかもと、八木、福永、一休、いとう、大和、土産品センターことぶき、千歳食堂、支笏食堂、大和、谷本商店の18店。平成20（２００８）年に発行された㈶自然公園財団支笏湖支部のパンフレット『Handy Guide 支笏湖』には19店、27年発行の同パンフレットには15店が載せられている。

売店区の指定から60年余を経ても店舗数が変わっただけで、その広さはほぼ0・5ヘクタールで変わっていない。これは、湖畔地区のほとんどが国有地のため自然公園法による商店や住宅などに対する規制（許認可）が徹底しているためである。一方その既得権が新規参入を阻んでおり、新規参入は店主の高齢化や病気などで営業が続けられずに店舗の売却が行われる場合がほとんどとなっている。

売店区の形成に合わせて店主らによる組合も設立されている。最初は、支笏湖観光船企業組合が設立された昭和30年ごろ設立とされる支笏湖商業協同組合で、商店のほかホテルなども加わっていた。商店だけの組合は44年設立の支笏湖商交会（初代会長・千葉進、会員15人）。同商交会はその後解散され、平成2年4月に再度設立されたが、20年8月に再び解散している。

商店街の形成に合わせ周辺の施設整備も進められた。その中でいつも問題となっているのが駐車場。集団施設地区の一般計画では商店区のすぐ東側を駐車広場と位置づけ、町が昭和27年に大型・小型車50台を収容する２１００坪（６９３０平方メートル）の駐車場を整備した。30年代に入り観光客の増加に合わせて駐車スペースは広げられていったが、夏場、イベント時の駐車場不足は年々深刻化していた。40年代に入ると大きなイベントの度に駐車場に入れない車両による交通渋滞が当たり前になるほど。国立公園指定20周年記念と銘打って44年7月12、13日に開催された第21回支笏湖湖水まつりに向けた関係機関の対策では、駐車場を当初公共駐車場のほか小学校グラウンド、スケートリンク跡地（現・第5駐車場）、ホテル裏の空き地、湖岸など9ヵ所として約１２００台の収容を計画。その後、空地探しを行って２０００台まで増やしたが、千歳警察署発表によるまつり開催2日間の車両数は前年の2倍、1万５０００台に達した。厚生省は翌45年秋に乗用車１７０台分を新たに整備している。

その後も駐車場の拡充が続いたが状況は変わらず、駐車場の一部有料化が始まった54年には市が駐車場の立体化を働きかけている。大きく変わったのは「自然公園核心地域総合整備事業（緑のダイヤモンド計画）」によってで、駐車場の再整備と拡充が行われた。既存の約1万６０００平方メートルに加え支笏湖レイクサイドホテル跡地の約２０００平方メートル、支笏湖ビジター

センター裏手の旧苫小牧営林署跡地約６０００平方メートルが整備された。

このほか29年３月には簡易上水道の敷設工事完成。35年に王子別邸（支笏湖倶楽部）を商店街南西から原型のまま現在の温泉街北端に移転。38年には市営支笏湖診療所落成。40年には苫小牧市と北海道中央バス共同出資支笏湖畔バスターミナル完成（～H12年）。43年には支笏湖初の山三ふじや支笏湖給油所開業（現・千歳ニッツウサービス支笏湖給油所）、46年には湖の汚染防止のため簡易浄化施設設置、55年には環境庁が湖畔の園地整備事業を行ってほぼ現在の形となった。58年には支笏湖下水終末処理場「支笏浄湖苑」が完成。平成６年には売店区周辺歩道のカラーブロック化、12年からの自然公園核心地域総合整備事業で支笏湖ビジターセンターの改築、歩道のロードヒーティング化などが行われている。

野営場

モーラップ野営場　昭和24（１９４９）年５月の支笏洞爺国立公園指定に合わせ施設整備が進められ、同年８月に道営野営場として開設された。50人を収容できるセントラルロッジのほかロッククケビンなどを備えた道内最大規模の野営場で、千歳町は31年ごろから支笏湖観光の目玉的施設として厚生省や道に町への移管を働きかけた。32年に移管に向けた正式申請書を厚生省に提出し、翌年６月９日に認可され、９月に移管された。

モラップ地区は明治期から木材の集積場などとして使われ、大正に入るとヒメマス釣りや樽前山登山の拠点、さらに観光地として広く知られていた。また、王子製紙の千歳川発電所建設に伴う王子軽便鉄道などによって歴史的に苫小牧との結びつきが深く、苫小牧にとってはいわば「縄張り」。27年度の苫小牧観光協会事業計画では、重点項目の一つとして「支笏湖畔、モラップ地区に対して千歳町と協定し、諸施設の計画促進に努める」として、支笏湖紹介を全国的に行うことや市営休憩所設置などを掲げている。

国立公園指定当時は、営林署の林道しかなく湖畔からの通船が主な交通手段だったが、指定翌年の27年８月には苫小牧市道支笏湖産業道路からモラップに至る「支笏湖畔モラップ観光道路」３・４キロが完成し、同月には苫小牧市営モラップ休憩所「樽前荘」が完成している。翌年８月には苫小牧市営バスがモラップに乗り入れを開始した。バス路線の開設で、モラップを訪れる観光客が飛躍的に増加した。野営場の利用者増を受けて苫小牧営林署が29年夏、モーラップ野営場隣接地に３００人収容の天幕付き野営場を造成し、札幌営林局林野弘済会の売店と民間の食料品店など５店舗を設けている。

写真４－６　昭28年当時のモーラップ野営場
（宮林廣撮影）

36年には両陛下を迎えてモラップ山麓で第12回植樹行事（５月24日）、湖畔で国土緑化大会、第３回国立公園大会（８月11、12日）が開かれた。この植樹祭に合わせ王子製紙が水明郷の第一発電所からモラップまで受電設備を設置している。厚生省の国立公園整備計画でモーラップ野営場改修も行われ、駐車場の拡張や照明灯設置、排水溝整備、トイレ新設などが行われた。同年の野営場利用者は１万４２００人。

利用者の増加に合わせるかのように同野営場や野営場外のいわゆる自由キャンプ場での酒酔いや盗難、けんか沙汰など風紀問題が深刻化し、37年に千歳警察署は臨時交番を設置した。また千歳市と道、苫小牧市では38年

ごろからそれぞれ樽前荘西側湖岸に仮設指定キャンプ場（青少年キャンプ村）を設けて児童生徒の受け入れを43年まで行っている。

野営場が大きく変わったのは平成５（１９９３）年４月。昭和52年に開設された支笏湖国民休暇村誘致の条件だった千歳市から同村への管理運営受託が実現した。これを受けて環境庁は平成８年、同庁所管と林野庁所管に分かれているモラップ地区集団施設地区をすべて環境庁所管地に所管替えして同野営場を「自然体験活動拠点」（エコロジーキャンプ）に指定し、野営場の再整備を開始した。９年には所管が千歳市から環境庁へ移された。この移管に合わせ「モーラップ野営場」の名称が正式な字名を使った「モラップ野営場」となった。再整備は環境庁が約１億円の事業費を負担して道が事業主体となって11年度に完成した。

ポロピナイ野営場　モーラップ野営場の利用者増加が続き、野営場外にテントが並ぶ状況から千歳市（Ｓ33・７市制施行）は、支笏湖での観光施設拡充を計画。札幌（石切山）～支笏湖（丸駒）間を結ぶ道路が開通するなど周辺の道路開発が急速に進められる中、札幌に最も近くなる幌美内地区を最有力地として札幌営林局、厚生省と折衝した。昭和34（１９５９）年11月に厚生省の認可を受け、36年６月１日に市営ポロピナイ野営場（約４・４ヘクタール）を開設した。同地区は野営場開設以前からヒメマス釣りや恵庭岳登山の拠点として利用者が多く、市では野営場開設に合わせて無料休憩施設を設置し、地元関係者が出資する㈱支笏湖観光センターに運営を委託した。開設初年度の利用者は、苫小牧市の学校キャンプ地指定で苫小牧市立弥生中学校２６０人など団体とヒメマス釣り客を中心に約５０００人だった。

船でしか行けない不便さはあったが、41年には利用者が１万２４７０人に増加。道道札幌支笏湖線全線開通、湖畔－幌美内間の有料道路が開通する42年６月には３００万円をかけて、現在の国道４５３号からの入口付近一帯にあった野営場から約５００メートル南寄りに山小屋（ケビン）３棟（20人・16人・10人収容）を建設している。

43年には野営場拡張の計画が立てられたが、同地区は恵庭岳の岩屑なだれによって形成された扇状地で、41年８月の集中豪雨で野営場が被害を受けるなどポロピナイ沢からの土石流が度々発生していたため、所管する苫小牧営林署などが難色を示して断念した。54年にはシーズン中（5～10月）のみ設置されていたプレハブの管理小屋を、木造モルタル平屋建ての事務所兼宿舎とした。

野営場の利用者は開設した36年の５０００人から40年７５６０人、48年１万１００人、63年１万４０００人と推移し、平成９（１９９７）年には最高の２万２０００人を数えた。

野営場の廃止は、平成に入って設備の整った施設が道内各地に開設されたことから、老巧化した同野営場が一般利用者に敬遠されたのが主な要因。18年度には収入２００万円に対し施設修理などの管理経費が５３６万円となり、多額な改修費の予算化も見込めないことから、市では再整備を断念し20年度での廃止を決めた。

美笛野営場　昭和43（１９６８）年春、土石流への危惧からポロピナイ野営場の拡張を断念した市は同年９月、札幌営林局に対して美笛川河口付近に国設野営場の新設と市への運営委託を陳情した。

利用者の増加でモーラップ、ポロピナイ両野営場がすでに飽和状態となっていることに加え、支笏湖周辺は47年の札幌冬季オリンピック滑降競技会場に決まった恵庭岳周辺のみならず洞爺湖、登別方面への道路開発が急速に進められていた中で、新たな観光施設（野営場）はぜひとも必要な施設だった。札幌営林局でも当時、美笛地区の新たな活用を模索していた。

環境庁との協議が整い、国立公園審議会で施設計画が認められたのが48年８月。同局では「国設美笛野営場３ヵ年造成計画」をまとめ51年５月に着工した。美笛川河口左岸の７・２㌶で、総工費は７８１万３０００円。用地造成と合わせ同年は４９０万円かけて管理棟、トイレ、炊事場などを建設した。

完成は52年６月で、車の乗り入れができるモビレージ（オートキャンプ）方式が採用された。キャンプ地区は１・45㌶、駐車スペースは０・32㌶。施設は管理棟１棟、トイレ１棟、炊事場２棟、焼却炉１基で開放期間は７月16日から10月15日までとされた。管理運営は市に委託された。関係者、マスコミを集めての開設式は７月23日に行われた。

札幌営林局は、54年の美笛川右岸美笛苗畑（美笛事業所11・４㌶）の閉鎖に伴い千歳市に跡地利用を打診。市は55年に跡地利用計画をまとめ、56年には大滝村（現・伊達市大滝区）を含めた広域観光開発のために千歳市、大滝村、日本航空㈱、日本楽器製造㈱（ヤマハ）の４者による滝笛環境資源振興協議会を発足させて大規模開発の検討を進めたが、釣り人を中心とした反対運動、さらに環境庁との協議も難航して計画の進展がないまま60年４月には同協議会が解散した。その後、市は同地区の開発構想を「美笛国際森林レクリエーション事業構想」、さらに「支笏湖国際コンベンション・リゾート構想」として進めようとしたが関係機関との協議が進まず断念した。このため市は新たに「支笏湖美笛地区自然環境整備利用計画」をまとめ、その一部として「千歳市野営場整備計画」を策定した。平成７年に苫小牧営林署から美笛野営場の譲渡を受けて、８年度から整備に着手。９年度までにコインシャワーやコインランドリーなどが備えられたセンターハウスのほか自家発電施設、給水ポンプ場、トイレ２棟、炊事棟２棟などの整備を終え、最終となる10年度にテント設営場所まで車を乗り入れることができるオートキャンプサイト、車の乗り入れができないフリーテントサイト、駐車場整備など行って同整備事業を終えた。なお、９年12月に千歳市観光施設条例が一部改正されて「美笛野営場」の名称が「美笛キャンプ場」に改められている。

キャンプ場の利用者は、開設初年度の昭和52年度が２０８０人、55年度が４８００人、63年度は１万６７６３人と増加し、平成13（２００１）年度には３万１２２人を数えている。

オコタンペ川口野営場（→オコタン野営場）　昭和33（１９５８）年に北海道不動産㈱が奥潭地区のオコタンペ川左岸に建てられた旅館を取得して35年に支笏湖グランドホテル、36年に支笏オコタン荘とケビンを開業し、敷地内に野営場を開設した。ホテルなどの宿泊部門は58年に休業し、平成４（１９９２）年に自然公園法による宿舎（宿泊）事業の廃止を届け出ている。同社が国から借りている用地４・５㌶のうち宿舎事業用地２・１㌶は返還されたが、野営場用地２・４㌶はそのまま残されて営業が続けられた。15年に加森観光㈱（本社・札幌）が三井観光開発㈱傘下の支笏湖観光運輸と共に買収し野営場の営業を続けたが23年から休業となった。

まつり

支笏湖湖水まつり　苫小牧観光協会の『30年のあゆみ　とまこまい観光の年輪』（１９８０年）に道南産業観光社代表の長桶鎌吉が記した「協会の生いたちと港まつり」がある。その中に「支笏湖が国立公園の指定区域になったことにより、支笏湖をもっと内外に売り出そうということから、支笏湖観光協会、千歳観光協会、苫小牧（観光協会）の三者によって〝支笏（湖）湖水まつり〟をやろうじゃないかと当時の千歳市役所の産業課長の米田（忠雄／後の市長、道議）さん（略）から相談をうけ、三者の意見がまとまった」とある。これが支笏湖湖水まつりの始まりとされている。

また、「内容のほとんどが苫小牧市と苫小牧（観光協会）が主体となり華々しく開幕、ＮＨＫの協賛行事や苫小牧花柳界の姐さんたちによる踊りが披露されている」とも記している。

実は千歳と苫小牧共催の湖水まつりが開かれる前年、千歳観光協会主催の「支笏湖湖水まつり」が開かれている。昭和29（１９５４）年３月２日付『苫小牧民報』に苫小牧観光協会の29年度事業計画が載せられ、湖水まつりについては「昨年千歳観光協会で初の湖水まつりを開いたが、今年は苫小牧観光協会でもタイアップ、苫小牧としては初の湖水まつりを盛大に開く」などとまるで苫小牧のまつりと言わんばかりの書き方となっている。明治の王子製紙苫小牧工場建設から始まる支笏湖と苫小牧の深い関係から、苫小牧市民にとって支笏湖は「縄張り」という意識が強かったのだろう。また当時の苫小牧市と千歳町の経済力の差も大きく米田産業課長が苫小牧に声をかけたのは、前年に千歳観光協会主催で湖水まつりを開いたものの期待外れだったことが要因ではないだろうか。

まつりは６月26、27日に湖畔とモラップの２会場で開催され、湖畔会場では26日夜に観光映画上映、27日にはボートレース、保安隊音楽隊演奏、船団行進、苫小牧移動演芸会、千歳町舞踊発表会が行われた。モーラップ会場ではキャンプ大会がメーンに行われ、26日午後６時半からキャンプファイア点灯式、苫小牧芸能連による演芸発表、ＮＨＫ「三つの歌」大会、打上花火大会、27日にはキャンプ大会参加者による恵庭岳・樽前山登山、オコタンペ探勝会、紋別岳ハイキングなどが行われた。

モーラップ会場でのまつりは、31年から苫小牧観光協会主催の「湖畔の夕べ」となり、その後千歳市主催の「モーラップキャンプまつり」となった。当初は盛大なキャンプ大会だったが、湖畔でのまつりが定着するにしたがって花火大会だけとなった。

支笏湖湖水開き　湖水開きは、ヒメマス解禁の６月１日に合わせた地元関係者の安全祈願が始まりとされている。

この行事が新聞に初めて出てくるのが昭和28年。６月３日付の『苫小牧民報』によると、支笏湖観光協会、支笏湖観光船企業組合主催で行われた「湖畔開き」では午後２時から湖上祓いが催され、地元住民など約２００人が参加して遊覧船やボートの無事を祈願した。船団行列も行われ、船名を染め抜いた旗や吹き流しを立てた11隻の遊覧船が湖に繰り出した。

湖畔開きが「湖水開き」と改称され４月開催になったのは52年からで、夏場だけの観光地・支笏湖を観光シーズンの始まる４月にＰＲしようと、同年３月に支笏湖温泉旅館組合、支笏湖観光事業協同組合、支笏湖商交会、千歳観光連盟などが支笏湖湖水開き実行委員会を立ち上げて企画した。

第１回支笏湖湖水開きは４月24日に開催された。プログラムは、支笏湖神社での安全祈願祭に続き紋別岳ミニ登山、北海道和種馬（どさんこ）試乗と幌馬車、野外演奏会、ロマンスボートレース、水上スキーのデモ滑走など盛りだくさんだった。メーンは「歴史の再現　いかだ流し」で、北海道の名付け親で幕末の探検家松浦武四郎が、著書『夕張日誌』で安政５（１８５８）年７月に「オコタンから湖畔まで筏（いかだ）で渡湖した」という故事を再現する挑戦。環境庁支笏湖公園管理員森孝順の発案で、森のほか地元の福永郷正、千葉信一、石井隆生の４人が長さ３・６メートルのトドマツ５本を組んだ筏で約８時間かけて成功させた。主催者発表で、当日は午前中だけで約５０００人の人出で賑わった。

第２回支笏湖湖水開きは翌昭和53年４月23日に開催され、現在恒例となっている湖上安全祈願祭でのヒメマス稚魚放流、観光シーズンの扉を開ける大きなカギの湖投げ入れが初めて行われた。

紅葉まつり　紅葉まつりは、昭和52年にそれまでの「湖畔開き」から「湖

水開き」に改称し6月開催を4月開催に決めたとき、あわせて秋のイベントとして開催が決められていた。

同年7月に開催された「第29回支笏湖湖水まつり」が終わり、主催する支笏湖紅葉まつり実行委員会も立ち上がってプログラムの検討も始まった。8月、洞爺湖・有珠山で噴火が発生し道内有数の観光地・洞爺湖に大きな打撃を与えた。一方、支笏湖では洞爺湖を避けた観光客の増加が見られ、地元観光業者は活気づいていた。当時を知る支笏湖温泉の福士国治は「噴火は他人ごとではなく気にはなったが、すでに開催は決まっていた。観光客も増えていたので計画通りやろう、ということになった」と話す。9月2日付の『千歳民報』には、有珠山噴火で増える観光バスや商店街の賑わいを伝えるとともに「有珠山噴火の被災者に気づかいながらもニンマリ。ふえだした観光客を定着づけようと十月には『紅葉まつり』を計画、支笏湖をより売り込む考えだ」と書かれている。

10月16日に開催された第1回支笏湖紅葉まつりでは、琴の野外演奏、子供遊びの広場、野だて茶会、バンド演奏、のど自慢大会、紋別岳歩こう登山、モデル撮影会、どさんこ（北海道和種馬）試乗などのイベントが行われた。また支笏湖名物のチップ汁、キノコ汁などを販売する野外謝恩味覚店も人気を集めた。イベントは夜も続き、園地に照明をセットしての「夜間紅葉鑑賞」、祭りの最後を飾る「紅葉まつりお別れの夕べ」では広場に大きなキャンプファイアが設けられた。主催者発表で2万人の人出があった。

千歳・支笏湖氷濤まつり　春の湖水開き、夏の湖水まつり、秋の紅葉まつりと支笏湖の観光客増に向けた3大イベントが出そろったが、冬場の支笏湖は相変わらずの冬眠状態が続いていた。この状況を打破しようと、地元観光業者や市が注目したのが昭和51（１９７６）年に初めて開催された旭川の「層雲峡氷瀑まつり」だった。53年1月に「温泉と氷とうまつり」開催が決められ、氷瀑まつりと網走の流氷まつりの視察が行われた。氷瀑まつりでは、指導に当たった恵庭市在住の造形芸術家竹中敏洋を知った。

まつりの名称は、平成20（２００８）年1～2月に連載された『千歳民報』座談会「氷濤トーク」で、前千歳市長の東川孝が「氷瀑まつり『瀑』には『滝』といった意味がある。氷濤まつりの『濤』は『波』。氷の波という意味です。層雲峡が氷瀑ならばこちらは氷濤で、とスタートしたんです」と語っている。

第1回支笏湖氷濤まつりの会場製作は、竹中敏洋の指導を受けて昭和53年12月に始まった。会場は千歳川呑口左岸の駐車場で広さは約６４００平方㍍。ポンプで支笏湖（千歳川）の水を汲み上げ55個のノズルを使って氷像の骨組みに散水（噴霧）を続けた。作業は商店街やホテル・旅館、遊覧船会社、市の職員らがそれぞれ担当氷像ごとに班を作って行った。いずれも無給のボランティア参加で、第4回から現在のように賃金制になった。

「大自然の感動と夢の世界へ」をテーマにした第1回のまつりは、54年1月30日に開幕した。会場へは氷の苔の洞門が誘い、高さ3㍍の樹氷群に取り囲まれた会場内には大きな海賊船や地獄門、迷路、氷のトンネル、高さ15㍍の展望台、ステージなどが並び、鉄橋（湖畔橋＝現・山線鉄橋）は氷のシャンデリアになり川には水中ライトが設置され、歌謡ショーや千歳氷濤太鼓競演、航空3社スチュワーデスによるモデル撮影会などが催された。主催者によると2月11日までの開催期間中に会場を訪れた観光客は延べ7万人。第2回は10万９０００人、第5回は20万人を数えた。

まつり最大の危機は、氷像製作の指導にあたった竹中敏洋が、支笏湖氷濤まつり実行委員会、千歳市、千歳商工会議所、千歳観光連盟の4者を相手取り、著作権、特許権の侵害に当たるとして、59年5月15日に作品の差

し止め（製作の中止）と損害賠償の支払いなどを求める訴えを札幌地裁に起こしたいわゆる「氷濤裁判」。層雲峡氷瀑まつりについても上川町と層雲峡観光協会に対して同様の訴えを起こした。

竹中は、恵庭市盤尻で長年かけて編み出した氷の芸術の製作方法で両まつりの第１回から指導に当たってきた。氷濤まつりの主催者側は第１回から５回までは著作権料、デザイン料、製作指導料の支払いを行ってきたが、第６回は要求を拒否し、竹中の指導なしでまつりを成功させた。

竹中はツララのイメージから創作した芸術作品を「造形樹氷」と名付け、第６回まつりでは会場そのものを指す「Ｉ・Ｃ・Ｆ」（アイスクリスタルファンタジー）と氷像23点をコピーとし、損害賠償などを求めた。これに対し主催者側は「抽象的なアイデアは著作物にあたらない」などと反論した。

両者の和解が成立したのは平成６（１９９４）年２月17日。和解条件は、①主催者による和解金３００万円の支払い　②会場入り口に原告メッセージをパネル掲示する　③７年から10年間まつりのポスター、パンフレットに原告の名前入りメッセージを掲載する―など。竹中は裁判中の昭和60年９月、「造形樹氷」について著作権を文化庁に申請し、同年11月に６作品について著作権が認められていた。

参考文献

秋庭鉄之『支笏湖ヒメマス移植１００年・養殖ヒメマス出荷10周年記念誌・千歳と姫鱒』千歳ヒメマス記念事業実行委員会　１９９３年／長見義三『ちとせ地名散歩』１９７６年／観光関連各種パンフレット／支笏湖の水とチップの会『支笏湖の人と自然』２００７年／地蔵慶護『北海道身近な歴史紀行』北海道新聞社１９９９年／支笏洞爺国立公園連絡協議会『支笏洞爺国立公園指定50周年誌』１９９９年／自然公園財団『パークガイド支笏湖』２００８年／篠田哲昭『湖畔橋（ペッパロ橋）』１９８９年／高橋長助『国立公園支笏湖沿革史　百年の支笏湖歌入物語』１９７２年／俵浩三『国立公園としての支笏湖と洞爺湖の発展過程の対照性』１９８７年／千歳観光協会『観光の千歳　国立公園の支笏湖』１９４９年／千歳観光協会・苫小牧観光協会『涼風は招くよ観光支笏へ　支笏湖案内図』１９５２年ごろ／千歳市『千歳市史』１９６９年、『増補千歳市史』１９８３年、『志古津』各号、『要覧ちとせ』各年、『広報ちとせ』／千歳支笏湖保勝会『観光地支笏湖案内　支笏湖を行く』１９４７年／苫小牧市『苫小牧市史』上巻１９７５年、『苫小牧市史』下巻１９７６年／山線鉄橋関連各種パンフレット／遊覧船・観光関連各種パンフレット／『朝日新聞』／『千歳民報』／『苫小牧民報』／『北海タイムス』／『北海道新聞』／『毎日新聞』／『読売新聞』

第４項　支笏湖の温泉

温泉開発

苫小牧市による温泉調査　支笏湖の温泉は、丸駒温泉など恵庭火山に由来する火山性温泉と、支笏湖温泉のように地下深くで温度が上がった地下水を揚水する深層地下水型の非火山性温泉に分けられる。

恵庭岳の麓にある丸駒温泉周辺と奥潭地区の温泉はともに恵庭火山に由来する火山性温泉で、丸駒の温泉は明治32（１８９９）年に鉱泉免許が出されており、奥潭地区の温泉もこのころ確認されたとみられている。丸駒温泉旅館の創業は大正４（１９１５）年12月、すでに廃業した奥潭地区の支笏湖グランドホテルは昭和35（１９６０）年に開業した（詳細は『市史』、『増補』、『新市史（上）』を参照）。

新たな温泉の探索は支笏洞爺国立公園が指定された26年から、市内に温泉を持たなかった苫小牧市が積極的に乗り出した。同年12月、苫小牧市と苫小牧観光協会が北海道地下資源調査所（現・地方独立行政法人北海道立

総合研究機構環境・地質研究本部地質研究所）に依頼して、モラップ地区を調査した。11月と12月の２回行われ、地下１・５㍍で地温９度という有望地点を発見している。27年以降も調査が続けられ、28年３月にこれまでの調査で有望視されていた40数ヵ所のうち地温９度以上の６ヵ所でテストボーリングが行われた。うち２ヵ所の地下５㍍で11度という結果が出ている。31年には風不死岳山麓と支寒内地区で行われ、さらに35年から37年には支寒内地区で調査を行ったが、いずれも温泉の可能性は否定された。

千歳町内で苫小牧市が温泉探索を行うことに違和感を覚えるが、苫小牧市は明治39年に王子製紙苫小牧工場新設が決まってから、苫小牧－支笏湖畔間への山線敷設など支笏湖畔地区の開発と切っても切れない関係が続いていた。湖畔の千歳住民にとっても交通の便がよい苫小牧はより身近で経済的な結びつきも深い「まち」だった。大正８年から10年と昭和22年には支笏湖地域の住民が苫小牧への編入を北海道に求めた請願を行っている。24年８月の支笏湖観光ホテルの開業は、国立公園指定を見越した苫小牧の経済界の呼びかけで実現し、同ホテルを運営する支笏湖観光㈱の資本金３００万円は千歳と苫小牧が１５０万円ずつ負担した。千歳側の出資者は21人だったのに対して苫小牧側は８人と、経済力の差は明らかだった。さらに余談になるが、湖畔地区などの王子製紙関連施設の固定資産税は、千歳町が自治庁に異議を唱える29年まで苫小牧市に収められていた。

このような背景が支笏湖の南側での温泉調査となったのだろう。千歳側からの異議はなかったようで、31年５月３日付の『苫小牧民報』に、風不死岳周辺の温泉調査について「この調査ではっきりこれが確認されると見られ市は期待しているわけで、有望となれば直ちにボーリングするといっている。ただ風不死岳は千歳町内で、この点問題だが、観光地開発上市は同町と何らかの協定を結んで、あくまで市の手で試掘すると考えているようである」とあり、調査や試掘に対する事前協議を伺わせるものはない。これが当時の苫小牧側の一般的な考え方だったのだろう。苫小牧市による支笏湖地区での温泉調査は、民間による同市錦岡や白老町虎杖浜での温泉ボーリングが本格化した昭和30年代中頃には行われなくなった。

支笏湖温泉　温泉が欲しいのは支笏湖の中心地湖畔地区も同じで、昭和31（１９５６）年には支笏湖観光ホテルがホテル前で温泉掘削を試み、地下３００㍍まで掘ったが水温が27度と予想外に低く断念。37年秋には同ホテルが経営する丸駒温泉に近い伊藤温泉から塩化ビニール管を使って湖岸沿いに温泉を引く計画を立て調査を行っているが実現しなかった。

湖畔の温泉開発が大きく動いたのは48年になってからである。支笏湖観光の通年化のためにぜひとも温泉が欲しかった地元の支笏湖観光ホテル、支笏湖レークサイドホテル、ホテル鹿の湯、ホテルトマコマイ（ホテル翠明閣）、トムロッジの５社は、１６０万円の費用を負担し千歳市が契約者となって北海道温泉探査事務所（虻田町、現・洞爺湖町）に調査を依頼した。

同年７月30日から９月７日まで行われた自然放射能探査は、事前調査で有望視された支笏湖レークサイドホテル周辺を中心に行われた。測定値が最も高かったのは同ホテルロビー付近だったが、ここでボーリングを行うわけにはいかず、ロビー付近に次ぐ値が出た玄関前ならば可能と報告された。湧出の可能性がある掘削深度は７４０㍍から１４００㍍とされた。

この調査結果を受けて市は、翌49年１月の市議会第１回臨時会に温泉掘削に伴う補正予算３５５０万円を上程した。内訳は５００万円を一般財源で充て、残る３０５０万円は指定寄付としてホテル５社が６１０万円ずつ負担するもの。同年４月、ホテル５社は温泉を維持・管理する「支笏湖観光事業協同組合」を設立した。

市が契約者となってアサノ建工札幌支店（本社・東京）が受注し同年３

月6日から始まった掘削は7月に1100㍍まで達し、当初見込みの60度には達しなかったが38・5度から40度の重炭酸ナトリウムを主成分とする重曹泉を掘り当てた（第1号泉源）。湯量は最大毎分700㍑あり、メタンガスを主成分とする天然ガスを含んでいることから、ガス分離施設を設けて温泉を42度程度まで加熱することになった。給湯施設工事を終え、晴れの通湯式は50年4月30日に行われた。なお、天然ガスによる加熱は期待ほどガスが得られず数年で取りやめている。

この温泉湧出を受けて市は61年4月20日、それまでの字名「湖畔」を「支笏湖温泉」に変更した。

新支笏湖温泉　湧出した温泉は「美肌の湯」をキャッチフレーズにして多くの観光客に親しまれたが、湯量の減少が大きな問題となった。平成6（1994）年には当初毎分420㍑あった湯量が最大毎分234㍑、20年には最大172㍑まで減少した。最大湯量から算出した汲み上げ限界量は毎分115㍑程度、適正汲み上げ量は毎分100㍑とされ、聞き取りによる配湯7施設の必要湯量毎分113㍑を下回る状態になっていた。

このため市は安定供給に向けた新たな泉源確保を計画。24年度に掘削のための予算を計上した。新たな掘削は上山試錐工業㈱（札幌市）が受注し、同年11月10日に安全祈願祭が行われ、支笏湖ビジターセンター東側の第4駐車場横で掘削工事が始まった。

新しい泉源（第2号泉源）は25年3月下旬に地下1100㍍で確認された。湧出量は毎分510㍑あり泉温は33・2度、泉質は旧温泉の「含食塩―重曹泉」に塩化物が加わった「ナトリウム―炭酸水素塩・塩化物温泉」で、旧温泉の効能に虚弱児童、慢性婦人病、飲用では慢性便秘などが追加された。総事業費は1億4300万円。開湯式は配湯する8施設への配管施設などの工事を終えた26年4月13日に行われた。

ホテル・旅館

（1）支笏湖温泉地区

翠明閣（→レイクサイドヴィラ翠明閣）　大正7年に王子製紙㈱苫小牧工場山林部関係者の宿泊施設として建設された。昭和11（1936）年から請負業者中村組（後に菱中興業、現・菱中建設）が王子関係者と一般旅行者のために受託経営していたが、終戦後の22年に米軍に接収され将校用厚生施設「サービスセンター」となっていた。接収が解除されたのは26年。営業再開当初の客室は22室、収容客数60人だった。

42年1月に建物を所有していた王子製紙と受託経営を行っていた菱中興業が㈱翠明閣を設立して、運営をホテル・トマコマイ（現・㈱ホテルニュー王子）に委託していたが、建物の老朽化のため平成12（2000）年から休館した。丸駒温泉旅館㈱が20年3月に王子製紙から株式の大半を取得して、同年8月に客室8室、収容客数24人の「レイクサイドヴィラ翠明閣」として営業を行っている。

支笏湖観光ホテル（→しこつ湖鶴雅リゾートスパ　水の謌）　昭和24年5月の支笏洞爺国立公園指定を目前にした支笏湖畔には、小規模な旅館が数軒あっただけとされている。このような状況の中、苫小牧の経済界では国立公園指定を見込んだホテル建設の構想が高まり、23年9月には千歳の経済界へホテル建設の呼びかけが行われている。翌24年3月には千歳、苫小牧の経済人29人が発起人となって観光ホテルの運営主体となる支笏湖観光㈱（本社・千歳町）の設立総会が開かれて、社長には王子製紙苫小牧工場庶務課長大木祐三、常務には千歳の伊藤弘（S29・8社長就任）が選出された。ホテルは同年5月に着工し、8月1日に支笏湖観光ホテルが開業した。開業当初の客室は15室、50人程度の収容とされ、27年には2階建て20室にする最初の増築工事が行われている。

その後も増改築が行われたが、宿泊客の減少などから経営は厳しく、平成20年３月に道東で阿寒グランドホテルなどを経営する鶴雅グループの鶴雅観光開発㈱（釧路市）が道央地区進出の第１弾として買収。翌年４月15日に高級ホテル「しこつ湖鶴雅リゾートスパ　水の謌」として営業を開始した。客室は53室で露天風呂付が18室、このうち４室が広さ１００平方メートルの特別客室。ジムやエステスペース、ビュッフェと懐石の２タイプのレストランなどが設けられた。

グリーンホテル（→トムロッジ支笏湖→北海ホテル）　昭和39年に芦別市のグリーンホテル㈱が、支笏湖畔に進出。同年11月に着工し、40年８月に開業した。芦別市の料理店「キリン」を経営する高橋時子が、支笏湖進出のために同社を設立した。グリーンホテルはシラカバを使った２階建ての山小屋風の外装が特徴で、客室は和・洋合わせて13室、バス付客室３室のほか食堂や大浴場、会議室が設備された。鉄筋ブロック２階建てで広さ１４４６平方メートル、総工費５６００万円。同ホテルは、その後岩倉組（苫小牧市、現・㈱イワクラ）に売却され「トムロッジ支笏湖」に名称を変更。55年に北海交通㈱（苫小牧市）が取得して「北海ホテル」となった。平成20年に建物の老朽化や利用者の低迷などで休館となり、25年に鶴雅観光開発に売却された。同社は29年４月、跡地に旅館「しこつ湖鶴雅別邸碧（あお）の座」建設の計画を発表している。

ホテル鹿の湯（→あしり支笏湖→支笏湖第一寶亭留翠山亭）　昭和44年６月には札幌市定山渓温泉の「ホテル鹿の湯」が進出した。当初、数百人が宿泊できる大規模ホテルを計画したが自然公園施行令で高さ13メートル以下という制限を受けて３階建てに縮小された。開業したホテルは１階に支笏湖を一望できる展望室やダンスホール、２階に大食堂、３階に和・洋客室などが設備されていた。平成２年９月、撤退した鹿の湯跡地に三倉商事㈱（本社・札幌市）が支笏湖では初となる和風高級タイプのホテル「あしり支笏湖」を開業した。鉄筋コンクリート造り地上２階、地下１階の寄せ棟式外観で、客室は39室、収容客数は１３５人。しかし営業不振で14年２月から休業となった。同年６月に札幌市定山渓温泉の第一寶亭留（ほてる）グループが買収し、同年９月から「支笏湖第一寶亭留翠山亭」となった。洋室30室、露店風呂設備の和室３室で収容客数は75人。同グループは、その後「支笏湖翠山亭倶楽部」も開業している。

支笏湖レイクサイドホテル　昭和47年７月１日に開業。鉄骨一部鉄筋コンクリート造りの２階建てで、客室は22室。50年に増築工事が行われ洋室８室と和室24室を新たに設けた。

55年に生活協同組合市民生協（現・生活協同組合コープさっぽろ）の関連会社協同観光に売却され、同じ名称で保養施設を兼ねたホテルとして札幌圏の生協会員を主客に営業が続けられたが、平成11年１月に営業不振、同コープの不採算部門整理のために休業した。13年に事業を廃止するとともにホテルは解体して国に返地された。

（２）その他の地区

丸駒温泉旅館（幌美内）　王子製紙発電所建設工事など請け負っていた佐々木初太郎が持病の坐骨神経痛を癒やすために訪れた恵庭岳の麓の温泉が気に入り、大正４（１９１５）年12月30日に創業した。ここは明治26（１８９３）年に漁村（現・恵庭市）の塩谷栄作が温泉旅館を営んだ場所だとされている。初太郎亡き後、昭和22年に姪にあたる２代目のヨシエが旅館の経営を引き継ぎ現在の礎を築いた。３代目、金次郎が56年に株式会社化して社長に就任。それまでの木造２階建て旅館の大規模改修に乗り出し、60年から第１期工事、62年から第２期工事を行って63年７月に完成。現在の鉄筋造り地上２階、地下１階、客室60室（収容客数２６９人）の施

設となった。平成4年には大浴場の改修が行われた。

支笏湖グランドホテル（奥潭）　『増補』などによると、建物は岩内町の高井清治がオコタンペ川河口近くに建設したが工事費未払いとなったため北海道不動産㈱が取得して昭和35年6月に「支笏湖グランドホテル本館」として開業した。36年7月に「支笏湖オコタン荘ケビン」、同年8月に「支笏湖グランドホテル別館」を開業。40年11月に「支笏湖オコタン荘ケビン」を増改築している。

大手企業の経営する奥潭地区唯一の宿泊施設として著名人の利用も多かったが、施設の老朽化などで58年から休業した。平成4（1992）年に宿舎事業の廃止を決めて施設を解体、国から借地していた4・5㌶のうち宿舎事業用地2・1㌶を植栽後に返地した。野営場用地はそのまま残されて営業が続けられた。15年に加森観光が三井観光開発㈱傘下の支笏湖観光運輸㈱と共に買収し野営場の営業を続けたが23年から休業となった。

伊藤温泉ホテル（幌美内）　支笏湖観光ホテルを運営する支笏湖観光㈱グループの一つとして昭和32年に、丸駒温泉旅館のすぐ東側に建設し「伊藤温泉」として開業した。開業当時の規模は不明だが、52年に改修が行われ、翌53年6月にバス、トイレ付きの和室12室のほか60人収容のグリル、大広間などが完成した。

平成8年に旅館業㈱ティーアールエス（千歳市）が支笏湖プリンスホテル跡地とともに買収して「いとう温泉」として営業を行ってきたが、25年4月に日光市で鬼怒川温泉ホテルや鬼怒川金谷ホテルを展開する金谷ホテル観光グループ（栃木県日光市）に売却された。

支笏湖プリンスホテル（幌美内）　支笏湖プリンスホテルは、支笏湖観光ホテルを運営する支笏湖観光㈱グループの一つとして昭和47年5月10日、ポロピナイ野営場と丸駒温泉旅館の中間にある入り江に開業した。木造モルタル造り一部鉄筋コンクリートの2階建てで、バス、トイレ付の客室21室のほか100人収容の宴会場などが設けられた。

48年9月の火災で10人が重軽傷を負い建物の3分の2が焼失したが、同年11月から新築工事を行い49年5月に営業を再開した。木造モルタル一部鉄筋造り2階建てで、客室は22室。58年ごろ廃業し建物は解体された。平成25年4月に金谷ホテル観光グループ（栃木県日光市）がいとう温泉とともに跡地を旅館業ティーアールエス（千歳市）から買収した。

参考文献

相山忠男・波松章勝・安藤葉子・許成基『かぱっ・ちぇぷ』1996年／支笏湖関連各種パンフレット／支笏湖の水とチップの会『支笏湖の人と自然』2007年／高橋長助『国立公園支笏湖沿革史　百年の支笏湖歌入物語』1974／千歳支笏湖保勝会『観光地支笏湖案内　支笏湖を行く』1947年／千歳観光協会・苫小牧観光協会『涼風は招くよ観光支笏へ　支笏湖案内図』1952年ごろ／千歳観光協会『観光の千歳　国立公園の支笏湖』1949年／千歳市『千歳市史』1969年、『増補千歳市史』1983年、『要覧ちとせ』各年／苫小牧市『苫小牧市史』上巻　1975年、『苫小牧市史』下巻　1976年／北海道立地下資源調査所『北海道立地下資源調査所報告第25号』1961年／丸駒温泉旅館『原始の森と湖に…　支笏湖丸駒温泉旅館80年』1995年／『朝日新聞』／『千歳民報』／『苫小牧民報』／『北海道新聞』

第２節　観光一般

第１項　千歳の観光

観光誘致の振興

千歳市の観光は、昭和24（１９４９）年５月、支笏洞爺国立公園に指定された自然豊かな支笏湖を中心に観光客誘致の取り組みを行ってきた。

支笏湖では大正４（１９１５）年に丸駒温泉、昭和27年にいとう温泉、50年に支笏湖温泉が開湯し、明治27（１８９４）年、阿寒湖から移植されたヒメマスがホテル、旅館や食堂で貴重な観光資源となっている。

昭和26年から支笏湖湖水祭り、52年から支笏湖湖水開き、支笏湖紅葉祭り、54年から支笏湖氷濤まつりなどのイベントを開催し、観光客誘致に取り組んでいる。

61年３月に札幌支笏湖国際観光モデル地区に指定され、外人観光客の受け入れ環境整備に向けて取り組みが始められた。支笏湖地区内は、環境省が整備を行っており、特に平成12（２０００）年から17年に実施された「緑のダイヤモンド計画」では、駐車場や歩道の整備、ロードヒーティングやバリアフリー化など観光客の受け入れ体制の整備が行われた。

一方、市街地における観光誘致の取り組みとしては工場見学が中心で、観光客を呼び込める観光施設はなかった。昭和55年に「インディアン水車」の愛称で多くの見学者が訪れ観光スポットとなっていた「捕魚車」を有効に活用した千歳市サーモン・パークの建設を計画し、翌56年に基本計画を策定した。その後、千歳市内観光ツアーの起点とし、インフォメーション機能を充実することによって観光ルートの拠点性を高めることを基本方針に関連施設を市内花園地区に整備した。平成６年９月に、淡水魚の水族館「千歳サケのふるさと館」を開館し、観光客誘致の大きな役割を果たしている。

17年４月に千歳アウトレットモール・レラが開業。同年６月には千歳サケのふるさと館の隣に道内85番目の道の駅として「サーモンパーク千歳」がオープンし、市街地においても観光客が訪れるようになったが、既存の施設を利用しての簡易的なものであった。

この２施設に立ち寄る観光客を中心市街地や支笏湖に誘客するために、17年度に「にぎわいトライアングル創出事業」として、千歳アウトレットモール・レラ内に千歳情報発信ブースを設け（Ｈ22廃止）、ポスターやパンフレットを配備し、農産物の展示販売や映像機器を活用した観光ＰＲビデオの放映など千歳の魅力をＰＲしていた。

観光関係事業者などによる観光客誘致の取り組みも積極的に行われ、主なものとして21年に、ホテル、小売り、観光、食品、ゴルフ場などの異業種と市の観光担当者らにより、千歳の魅力づくりと活性化を目的に「千歳の観光を考える会」が発足した。同年から冬期間、市内観光施設巡回無料バス「ぐるぐる千歳冬号」を運行し、観光客が市内を周遊できる環境を整えて通過型観光から滞在型観光に向けて取り組んでいる。26年には27団体が会員となり活動を続けている。

なお27年には、道の駅サーモンパーク千歳は目的型の道の駅として新しくオープンした。飲食、物販などの魅力ある店舗の出店や施設内アトリウム、女性や子育て世代を意識した地域振興施設と集客力のあるイベントの実施ができる屋外イベント広場や利用しやすい駐車場の整備などを行い、さらなる観光客の誘致に向けリニューアルを行った。また、入館者数が低迷していた千歳サケのふるさと館も新たな展示ゾーンや支笏湖大水槽などを設置し、大人も楽しめる水族館としてリニューアルして集客力の強化を図り、名称も実態としてわかりやすい「さけのふるさと千歳水族館」に改

めた。

全国的に外国人観光客が増加する中、新千歳空港が所在する千歳においても北海道や千歳観光連盟が主催する海外プロモーション事業に参加し、市長等がタイやシンガポールなどを訪問してトップセールスを行っている。

また、千歳には多数のゴルフ場が整備されていることから、ゴルフと観光を結び付けた広域的な取り組みとして、一般社団法人北海道ゴルフ観光協会や北海道運輸局、近隣自治体と連携し、アジア諸国の旅行バイヤーやメディアを招いてゴルフ体験や商談会、観光地視察を行うゴルフツーリズムコンベンションも開催している。

支笏湖では22年に、ご当地グルメ「支笏湖アキヒメ温玉ライス」を開発し、９店舗で販売、28年にはヒメマス魚醤「姫しずく」が商品化され支笏湖温泉の商店街や旅館ホテルで販売されている。市内全域においては26年からキリンビール㈱を皮切りに飲食店が千歳の卵を使用した各店オリジナルの「千歳バーガー」を展開している。

観光ＰＲはパンフレットやポスター、ホームページ、国内外の観光プロモーション、ＳＮＳなど幅広い媒体を使っているほか、市内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒により「千歳市観光ＰＲ隊」を結成し、修学旅行先や新千歳空港において外国人旅行客へ千歳の魅力を広く伝える活動も行っている。

観光誘致の取り組みは、官民が連携しながら時代の変化に対応しつつ継続して行われている。

サケのふるさと千歳水族館とサーモンパーク

サーモンパーク計画の始まり　昭和50（１９７５）年頃から、日本の漁業を取り巻く国際環境は大きな変化に見舞われていた。２００海里専管水域問題、海で成長し産卵のため海から川へ遡る遡河性魚類の母川国主義[1]、北洋漁業の規制強化などといった水産資源に関わる問題がクローズアップされ、捕る漁業から育てる漁業への転換が始まり、さけます人工ふ化放流事業に新たな期待と注目が寄せられるようになった。

一方、ほぼ時を同じくして、全国的な観光ブームが巻き起こった。空港と国立公園支笏湖を併せ持つ千歳市も例外ではなく、中でもインディアン水車（捕魚車）によるサケの捕獲風景は全国的にも人気を博し、秋になるとサケの遡上と水車による捕獲の様子を見るため多くの観光客が千歳川に集まるようになっていた。その数は年々増加し、千歳市としても周辺整備の必要に迫られていた。このような時代の流れを背景に54年、千歳市における観光開発や千歳川周辺の都市整備などを目的としたサーモンパーク計画が議会に提起され、翌55年には「千歳市サーモンパーク基本構想」を策定、計画実現に向けた歩みが始まることとなった。

写真４－７　千歳サケのふるさと館　外観

千歳青少年教育財団の設立　サーモンパーク計画においては当初から、中核的建造物となるパビリオン（現・サケのふるさと千歳水族館）の建設が予定されていた。パビリオンの運営には、社会教育的な性格を持つ公益法人が適任との判断から、昭和57年３月12日、北海道教育委員会の認可を受け、「㈶千歳青少年教育財団」が設立された。この後、サーモンパーク

の公園整備と用地の取得については千歳市、パビリオン等の建設については千歳青少年教育財団が担うこととなった。

しかし、この構想の実現にあたっては、解決しなければならない２つの大きな課題があった。まず、千歳川を遡上するサケの群れを窓越しに観察できる「水中観察室」の実現である。サーモンパークの予定地には、当時既に北海道開発局による改修計画が持ち上がっていた一級河川である千歳川の河川敷が含まれており、そこへ水中が観察できる観察護岸を整備する計画であった。しかし、一級河川の護岸から川の中を観察できる施設など前例がなく、開発局との護岸計画の変更交渉は難航することとなった。

もう一つは当時水産庁が管轄していた、さけます増殖事業計画との調整である。特にサケの捕獲を行うインディアン水車は、当時サーモンパーク予定地の下流に位置していたため、そのままでは水中観察室を整備しても遡上するサケの姿を見ることはできない。インディアン水車のサーモンパーク上流側への移設は、まさに構想の生命線ともいえるものであった。こうした関係機関との様々な調整の末、「千歳市サーモンパーク基本計画」推進の基本的合意が成立したのは、基本構想策定から7年後の62年のことであった。（第11章第3節第5項「青少年教育財団の活動」参照）

千歳サケのふるさと館開館　関係機関との合意形成がなされたことにより計画は実現に向けて歩みを早めた。河川敷地や水産庁管理用地との整理が進む中、まずは昭和63年に、北海道開発局による千歳川の河川改修工事が始まり、平成３（１９９１）年には日本初となる水中観察護岸が完成した。４年には公園建設工事に着工。インディアン水車を観覧できる人道橋（現・インディアン水車橋）の建設や、河川敷地、駐車場、公園広場などの整備が次々と進められ、５年にパビリオン本館の建設工事が着工されるとともに、パビリオンに展示する魚類を育成する予備施設として泉沢飼育棟が完成した。６年８月、インディアン水車が従来の場所から２５０メートル上流に設置された。また、同月には一般公募によりパビリオンの名称が決定。千歳市サーモンパークの中核施設となる淡水魚水族館「千歳サケのふるさと館」が開館したのは同年9月10日。サーモンパーク構想策定から14年が経過していた。

施設内容は、地下1階、地上3階建て、延べ床面積約３０００平方メートル。大小25の水槽にサケ科を中心とした58種1万匹を展示。1階は淡水魚が泳ぐ大型水槽を中心とした展示水槽、大型マルチビジョン。2階は図書・ＡＶ施設とレストラン。3階にはルーフテラスなどが配置された。そして地下には、世界でも類のないサケが遡上する川底を直接見られる観察室が設けられた。

オープン当初のふるさと館

オープン初日、開館前には既に行列ができ、テープカットのセレ

写真４－８　水中観察室から見たサケの群れ

写真４－９　千歳サケのふるさと館オープン

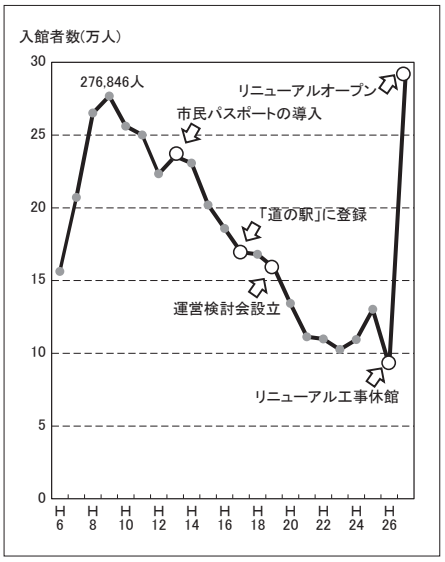

図４－３　入館者数の推移

モニーとともに、待ちかねた多くの来館者が館内になだれ込んだ。最初の２日間で入館者数は１万人を超え、オープン40日目には10万人を達成するという勢いであった。しかし、順調だった入館者数は平成９年度の27万６８４６人を頂点として徐々に減少し始め、その後入館者増加に向けた様々な対策が実施されることになる。その一つとして、千歳市サーモンパークが「道の駅・サーモンパーク千歳」に認定されたのは、17年６月であった。土産物のレストランや地物野菜の直売所などが新設され賑わいを見せたが、ふるさと館の入館者増には結びつかず、20年度の入館者数は、ついにピーク時の半分ほどにまで減少した。

道の駅とふるさと館のリニューアル　この状況を受け、平成21年にまとめられた「経営改善等方策策定業務報告書」に基づき、22年には「道の駅再整備事業計画」が策定され、道の駅と千歳サケのふるさと館のリニューアルが進められることとなった。26年より工事のため休業に入り、道の駅は公園敷地および新たなセンターハウスの建築、千歳サケのふるさと館は水族館施設であることが来館者にわかるように「サケのふるさと千歳水族館」と改名し、開館以来初めてとなる館内展示の大規模な改修を実施した。「清流と緑の癒やし空間」をテーマに大人も楽しめる空間演出や支笏湖の水中景観を再現した新しい大水槽の設置、世界の淡水魚展示や体験ゾーンの充実など、新たな魅力の創出により来場者の増加を図り、27年７月にリニューアルオープンし、27年度の来場者は29万１８５０人となった。

註（１）さけ・ます類の資源は漁獲された場所ではなく、そのさけ・ます類が生まれた川（母川）がある国に資源管理や漁獲量決定の権利があるという考え方。

観光客入込動向

昭和29（１９５４）年から平成９（１９９７）年までは、観光入込数の調査対象は支笏湖地区のみで、昭和29年の観光客数は16万８０００人、北海道初の観光有料道路となった支笏湖畔有料道路が完成した42年には１２１万４７００人となり、１００万人の大台を超えた。

48年に２００万人を超え、平成２年には３００万人目前の２９１万９６００人を記録したが、その後は減少が続いた。

北海道が平成９年度から集計方法を延べ人数から実人数に変更するとともに、調査対象を主要観光地１０４ヵ所から２０２市町村とした。これにより千歳でも10年度から、６年にオープンした千歳サケのふるさと館や宿泊施設、ゴルフ場、工場見学を実施している企業などから協力を得て、市街地も含めた観光客入込調査が始まり、10年度の日帰り客数は１８２万２０００人、宿泊客数が17万４００人という結果となった。

13年度には、外国人宿泊客延べ数の調査項目が初めて追加され、同年度は１万８７００人となっている。

日帰り観光客数は、16年度までは横ばい状況が続いたが、17年４月に南千歳駅に隣接する柏台地区にアウトレットモール・レラがオープン。同年６月に道の駅サーモンパーク千歳がオープンしたことにより、日帰り客数が１８０万人前後から４００万人台に急増した。さらに25年度には５００

万人を超え、26年度は9月の大雨災害の影響もあり４６７万７８００人と減少したが、その後は増加している。

宿泊観光客数は、20年度に20万人を超え、26年度は22万９３００人となり、そのうち外国人宿泊延べ数は、19年度には３万３１００人、21年度が４万４１００人、26年度は７万６５００人と増加している。国・地域別では、1位が中国、2位がタイ、3位がシンガポール、4位が台湾、5位が香港、6位がオーストラリア、7位がアメリカ、8位が韓国となっている。このように近年、外国人観光客が急激な伸びを見せている一方で、日本人観光客は減少傾向にある。

市全体の観光客入込動向は、昭和56年の台風・大雨災害や平成23年の東日本大震災などの自然災害が発生した年などを除くと増加傾向にある。また、観光客の動向をみると日帰りの割合が高いものの、空港に至近という利便性からホテルの新増設などにより宿泊客は増加傾向にある。

参考文献

千歳市青少年教育財団『千歳サケのふるさと館　館報［第1～8号］』１９９６～２０１５年

第2項　観光連盟

千歳観光協会・千歳観光連盟

支笏洞爺国立公園が全国14番目の国立公園に指定されるおよそ2ヵ月前、昭和24（１９４９）年3月、町議会第1回臨時会での協議事項として「千歳観光協會設立について」が山崎町長から提出されている。

本町多年の懸案であり期待せられてゐた支笏湖を中心とする支笏洞爺国立公園の設置に際し将来益々組織的にその発展育成に努め乍町経済に寄與せしめるために千歳観光協會を設置したいと思うが御意見を承りたい。

国立公園指定が確実となり、町の主導で千歳観光協会の設立準備が進められ、同年5月24日に千歳観光協会が誕生し次のとおり役員が選ばれた。

会　長　山崎友吉（町長）
副会長　渡部栄蔵（町議会議長、支笏湖観光㈱常務）
理　事　伊藤弘（町議、支笏湖観光㈱常務）、渡部郁郎（町議、千歳商業協同組合理事長）、河合勝治（町議、日本通運㈱千歳営業所長）、中川英男（千歳郵便局長、支笏湖観光㈱常務）、幸田太郎（町議、千歳駅助役）、春日不二夫（千歳鉱山㈱重役）、谷本亀（支笏湖郵便局長）、笹島芳喜（町議）
監　事　吉田信一（町議）、山上順造（北洋無尽会社千歳出張所長）
事務局長　高橋為次（町助役）
顧　問　苫小牧営林署長、恵庭営林署長、千歳駅長、土木現業所千歳出張所長、北海道水産孵化場千歳支場長、王子山線駅長

同年9月、協会は支笏湖を中心とした千歳町の観光名所等を紹介する「観光の千歳　国立公園の支笏湖」を発行し、沿革も含めた町の概要も盛り込み47ページに及んでいる。翌25年には観光宣伝のため、空港や支笏湖を歌詞に盛り込んだ「千歳音頭」を制作した（3項参照）。

その後、支笏湖、空港を抱える観光都市千歳のさらなる観光開発、空港利用を促進する中核的存在となるため、45年4月の総会で法人化の方針を決定し札幌陸運局に許可申請を行った。同年7月21日付で法人認可を受け、29日には設立総会を開き、社団法人千歳観光連盟（米田忠雄理事長）が発足した。市町村単位での法人化は道内初だった。それまでは会員の会費と市からの補助金等を運営資金としてきたが、連盟設立後は法人として独自の資金導入が可能となった。その第一歩として同年10月、空港北側国道36

号沿いの駐車地帯に飛行機の離発着を眺められる「交通安全無料休憩センター」を建設し、飲み物、軽食等の提供販売を始めた。なお、休憩センターは48年に国道36号の４車線への拡幅に伴い撤去された。

さらに市の後押しを受け、47年12月13日付で千歳空港の有料駐車場（約５００台）の管理について運輸省の認可を受けた。この際、運輸省は駐車場での車上荒らしなどの被害防止から有料化による管理面の充実を考え、市は収益を地元観光地整備等に活用することや米軍基地離職者の救済となることを期待した。同月24日から駐車場の営業を開始し、翌年からは航空機騒音対策等に充てるよう収益の一部を市に寄付している。当初プレハブの仮施設だった管理事務所は48年７月に新築。その後、50年７月には隣接する無料駐車場を併合して全面有料化して約７００台に拡大。さらに運輸省用地を借用し54年には約１４００台まで拡張した。

平成４（１９９２）年の新ターミナルビル供用開始後は、約２８００台分の駐車場管理を㈶航空公害防止協会（Ｈ５～空港環境整備協会）と折半することとなった。

観光戦略としては、昭和50年10月、千歳を代表する観光土産の推奨品の選定を始めた。地元観光土産品のＰＲと業者の振興を図るとともに観光客の土産品選びの目安となることを目的とした。推奨期間は３年間とし、初の推奨品には菓子６品と民芸品１品が選ばれた（後述「観光物産」参照）。

また、千歳観光協会設立時から支笏湖を中心とした観光パンフレットを発行してきたが、59年７月から観光情報誌「ジャスト・ライク千歳」を年１回発行し１部１００円で販売を始めた。さらに平成元年11月発行の第６号を「千歳」に改名、翌年11月の第７号からは「ビューティファイ千歳」とさらに改名し１部１５０円とした。26年までに30号が刊行されている。

観光シーズンの７月から８月には千歳駅前に観光案内所を開設していたが、昭和58年４月から千代田町６丁目の第12ふじやビル４階に観光部門を移転し、その後、平成16年４月にオープンしたＪＲ千歳駅西口複合商業施設「ペウレ千歳」（現・千歳ステーションプラザ）内に観光案内所を開設した。同施設内には22年６月、地元名産品などを扱う千歳観光物産サテライト「ミル」も開業した。

そのほか交流・連携事業として、昭和56年８月31日には韓国済州道観光協会と姉妹提携を結び、ホテル日航千歳で調印式を行った。その前年10月に千歳商工会議所が創立20周年を記念して訪韓した際、観光地・済州島を抱える済州道観光協会から提携を持ちかけられたのがきっかけとなった。また平成16年には札幌国際大学、18年には千歳高等学校と産学連携協定を締結し、観光アカデミー開設や学生も参加した調査研究等の成果を上げている。

歴代会長は次のとおり。

初代　山崎友吉（Ｓ24～45）、第２代　米田忠雄（Ｓ45～48）、第３代　吉田信一（Ｓ48～54）、第４代　米田忠雄（Ｓ54～58）、第５代　渡部茂（Ｓ58～Ｈ10）、第６代　我孫子健一（Ｈ10～15）、第７代　瀧澤順久（Ｈ15～）

千歳音頭

宣伝用レコードの作製　昭和24（１９４９）年５月16日、支笏洞爺が国立公園に指定された。25年になって苫小牧観光協会が宣伝用レコードの作製を考え、千歳観光協会の中川種次郎と支笏湖観光協会の谷本亀に共同制作をもちかけた。

衆議一決、７月９日、苫小牧の地元紙『南北海』（Ｓ26・９改題『苫小牧民報』）に「苫小牧歌謡／支笏湖音頭歌詞を募集」と記事が掲載された。後援は苫小牧市と千歳町、南北海新聞社となった。それぞれの賞金は大卒公務員の初任給２ヵ月分に相当する１万円と高額だった。７月末までに「支

笏湖音頭」に１０１篇の応募があり一次審査で数作にしぼり、「苫小牧歌謡」審査通過作品とともに横浜の日本ビクターに送ったのが８月４日のことだった。８月27日付『南北海』に「苫小牧シャンソン」と「千歳音頭」の歌詞が決まったとある。

北郷雪夫の応募作品「支笏湖音頭」は、戦前からの売れっ子作詞・作曲家であった東辰三によって今日われわれが耳にする歌詞に補作され「千歳音頭」となった。東の戦後ヒット作としては22年の「港が見える丘」（平野愛子歌唱）がある。「千歳音頭」はうぐいす芸者として知られた市丸が歌った。東は９月27日に50歳の若さで病死、「千歳音頭」は東の遺作ともいえる作品となった。

作詞の北郷雪夫は明治末に上川管内の士別で生まれ、歌詞を応募した当時は読売新聞社稚内通信部で記者をしていた。作詞は玄人はだしで、25年に「室蘭音頭」、「千歳音頭」のＡ面となった「苫小牧シャンソン」（吉田正作曲）も北郷の応募作だった。北郷の本名は福田清、定年退職後は福島県で暮らし平成９年に87歳で亡くなった。北郷雪夫とは北海道を思ってのペンネームであろう。北郷の作詞としてほかに「宗谷観光音頭」、「岩見沢音頭」などがある。

千歳音頭初演　昭和25年７月末から苫小牧に降り出した雨は４４７・９ミリに達し人々の生活に大きな被害を与えた（死者１、流出家屋15、床上浸水１５３０）。

苫小牧港まつりの前身である観光まつりは、水害からの立ち直りを願って９月21日の前夜祭から３日間、勇払街道と新川通が交わる苫小牧市役所の広場（本幸町１丁目）で開かれた。舞台では「苫小牧シャンソン」と「千歳音頭」が花柳流の千葉栄一によって振り付けられ、観光まつりの苫小牧歌謡発表会で初めて披露された（34年発行の振付図は札幌日の丸舞踏会工藤倉子の振り付けとされる）。

観光まつり移動演芸班は錦岡、勇払を巡回、23日には苫小牧の奥座敷である支笏湖畔で苫小牧歌謡発表会が開かれ千歳におけるお披露目となった。踊りは苫小牧の芸妓と市立苫小牧東、弥生中学校女子生徒によって披露された。

千歳市街地では26年10月23日のもく星試験飛行・民間航空千歳空港開設記念祝賀会会場の格納庫において苫小牧の芸妓15人によって披露されたが、一般町民の知るところではなかった。レコードは錦町１丁目の博信堂で販売された。

写真４－10　千歳音頭の初演（苫小牧歌謡発表会　支笏湖畔）

千歳音頭の歌詞の不思議

一　銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ　ヨイヨイ　空の港も　ひらけて晴れて
今日もあちらの　今日もあちらの　ホイホイホイ　お客様
ソレ　チトセヨイトコ　アリャリャンリャン　シコツ　ヨイヨイ　ヨーイヤナ

二　招くネ　招く支笏湖　樽前山は　燃えてひとすじ　千歳の契
情海より　情海より　まだ深い

三　木影ネ　木影すずしいモラップあたり　ファイヤかこんだ　キャンプの村で

若い血潮も　若い血潮も　又燃える

四　ダムのネ　ダムのしぶきにしっぽり濡れて　届く思いに　散らした紅葉
胸に灯ともす　胸に灯ともす　発電所

五　美笛ネ　美笛鉱山に黄金が湧いて　月の丸駒　湯もやの中で
好いた同志の　好いた同志の　桜色

六　孵化場ネ　孵化場娘の気だてに育て　お洒落姫ます　湖くらし
誰が釣るやら　誰が釣るやら　恋の味

1番の「銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ」と見果てぬ夢の国際空港を歌い込んでいるが、民間航空再開後の空港がどこになるのかも決まっていなかった25年当時、この先進的な発想はどこからきたのだろうか。また、2番以降の俗っぽさ「月の丸駒　湯もやの中で　好いた同志の　好いた同志の　桜色」と1番との乖離はなぜなのだろうか。「千歳音頭」の歌詞の不思議である。「銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ　ヨイヨイ」とリズミカルな街頭放送は千歳に初秋を告げる風物詩となっている。

参考文献

千歳観光連盟「千歳観光連盟の歩み」２０１１年／千歳市『広報ちとせ』６月号１９９２年／苫小牧観光協会『30年の歩み　とまこまい観光の年輪』１９８０年／苫小牧市『苫小牧市史下巻』１９７６年／守屋憲治「千歳音頭と支笏湖」『志古津』第14号２０１１年／『千歳民報』／『苫小牧民報』／『北海道新聞』／『南北海』

第３項　市街の宿泊施設

旅館・ホテル

市街地における旅館・ホテルは、昭和10（１９３５）年８月に支笏湖地区を含む老舗の旅館で構成する千歳旅館組合を設立し、親睦と情報共有などを行っていた。ほかに30年４月設立の千歳第１旅館組合と称する団体も一時期存在した。

52年には、千歳市内に地上10階建ての国際級ホテル建設計画が明らかにされ、当時の東峰市長は「千歳空港の国際化に願ってもない事」と歓迎する一方、旅館業者間などから「地元業者が圧迫される」といった声が出て論議を呼んだ。翌年１月に千歳旅館組合の舟生博会長、川南地区発展期成会の高木秀邦会長、本町自治会の岩本千年男副会長、丸屋勝男総務部長の４人が市役所を訪れ岩瀬助役に「川南地区、街の発展のためにホテル建設計画に賛成する。建設地は本町地区にしてほしい」と住民や同組合の意思を伝えた。

55年に、市内で初の本格的国際ホテルとして、本町４丁目に客室数１６７室、収容人員２５１人のホテル日航千歳（現・ホテルグランテラス千歳）が開業し、これまで民航機の欠航が出ると札幌や苫小牧のホテルに旅客が奪われていたが、地元での受け入れが可能となった。

千歳旅館組合では宿泊者増に向けて、陸上競技の大会や合宿の誘致などについて、市を交えた協議会なども発足し、青葉公園陸上競技場の使用料や宿泊代、食事などの課題が検討され、平成元（１９８９）年に開催されたはまなす国体では、初めて市内のどのホテル、旅館に泊まっても同一の宿泊料と食事条件による受け入れが行われた。しかし、各ホテルの設備などの違いなどの理由から継続することができなかった。

９年には、北栄２丁目に宿泊、宴会規模とも、市内で最大となる室数２８８室、集客人員５３７人の全日空ホテル（現・ＡＮＡクラウンプラザホテル千歳）が開業した。10年以降、老舗の宿泊施設の廃業や新規のビジネスホテルの開業、一部、既存ホテルの経営者が変わったことなどにより千歳旅館組合は自然解散に至った。

旅館・ホテルの軒数、客室数、収容人員の推移について、調査が始まった４年には、軒数が16軒、客室数８４６室、収容人員１４８２人、10年が17軒、客室数１３１４室、収容人員２１８６人、20年が16軒、客室数１５１１室、収容人員２３０６人となっている。現在、市街地に旅館と称する宿泊施設はなくなった。

26年は１軒が廃業し、市街のホテルは15軒、客室数１６７５室、収容人員２５４７人になり、軒数は減少したが客室数、収容人員は増えている。

市では26年４月、新設した観光スポーツ部に観光政策担当の主幹、28年４月には誘致推進係を配置して、スポーツ合宿・大会誘致のための各種取り組みが行われ、30年２月には２０２０東京オリンピックの陸上ナショナルチームの直前合宿地に内定した。これらを含めた宿泊施設利用者の増加が見込まれ、新規ホテルの建設が計画されるなど受け入れるための環境整備が進められている。

また、最近の外国人観光客の宿泊状況は、団体客だけでなく、少人数での旅行者が増えてきているのが特徴である。このことから、少人数が宿泊できる簡易宿泊所も開業している。

第４項　各種行事

インディアン水車まつり

ふ化放流事業のため、サケ親魚捕獲用の水車（捕魚車）が千歳川で初めて使用されたのは明治29（１８９６）年である。捕魚車は、北海道庁の初代水産課長となった伊藤一隆が様々な水産事情調査を目的として人工ふ化放流事業の先進地でもあるアメリカへ渡った際に西海岸のコロンビア川で実見したものと同様の構造を持ち、水流で回転しながら金網を張った３つのカゴが遡上したサケをすくい捕る仕組みになっていた。昭和46（１９７１）年頃から捕魚車は「インディアン水車」と呼ばれるようになり（山田１９９２）、水車によるサケの捕獲は当時日本でただ１ヵ所、ダムによる調整で水量が一定している千歳川ならではのもので、秋には遡上するサケの群れと捕魚車を見ようと49年頃から見物客が増えるようになった。増え続ける見物客の受け入れ対策として千歳観光連盟は、51年にインディアン水車がある西越さけ捕獲採卵場に駐車場と売店を整備し、また高さ約４メートルの観覧台も設置された。

こうした賑わいを背景に、地域の新たな観光行事として「第１回あきあじ祭」が開催されたのは52年のことであった。地元の末広会（千歳信用組合末広支店利用者の会）主催、末広会青年部敬友会の協賛にて、末広新町町内会館を会場として、11月６日の１日のみの開催であった。この年の西越さけ捕獲採卵場には、９月から10月までのシーズン中に約５万５０００人もの観光客が訪れた（『増補』）。あきあじ祭は翌年も10月15日に開催され、この祭がインディアン水車まつりの原点となったといわれている。54年の開催は会場を西越さけ捕獲採卵場に移し、祭の名称も「第１回千歳川さけ祭り」に変更された。当時のプログラムには「郷土千歳の鮭を見直し、秋の味覚を楽しみインデアン水車となじもう」というフレーズが書かれている。またここから、開催日程が２日間に延長された。

写真４－11　第１回千歳川さけ祭り

写真４－12　インディアン水車まつり（S60）

千歳川さけ祭りはその後、新町東公園（現・花園２丁目）にて開催され、第５回となった58年には、10月８日～10日の期間中に延べ11万５０００人が来場し、サケの遡上期間全体を通して訪れた観光客は55万人にものぼった。また、この年から会場に人工池を造ってサケを放流し、釣り堀やつかみ取りが始まった。

この５年の区切りをもって翌59年には祭のイメージの一新が図られ、水車による漁法というその独自性を強調した「インディアン水車まつり」に変更され、以後はこの名称が使用されている。祭は、捕獲場が置かれる末広地区の商店街や末広、花園、稲穂などの町内会、千歳市や千歳観光連盟などで組織する実行委員会の運営により毎年９月中旬頃の３連休に合わせて開催され、サケ鍋やイクラ弁当の販売のほか、釣り堀、各種ステージ等が行われ千歳の秋を象徴する人気の観光行事へと成長している。

平成６（１９９４）年には千歳サケのふるさと館がオープン、翌７年にかけて千歳市サーモンパーク（愛称・インディアン水車公園）が整備されると、インディアン水車まつりは会場をサーモンパークに移す。以後も順調に回を重ね25年には第35回を迎えた。なお、サーモンパークと千歳サケのふるさと館のリニューアル工事に伴い26年の開催は見合わされた。

空港まつり

昭和31（１９５６）年８月、町内の商店街で、売り上げが落ちる８月（夏枯れ）を吹き飛ばそうと、大売出しや抽選会などの企画、通りの飾り付けで集客を狙った商工まつりが開催された。回を重ねるごとに華やかさが増し、商店街通りに七夕の飾り付けがなされ、のど自慢や商店訪問マラソン、花火大会などが行われ多くの町民で賑わいをみせた。

また、航空記念日の９月20日にちなみ、航空思想の啓蒙を図るため、市が航空局と民航会社に呼びかけて航空まつりを開催することとし、第１回の37年は20日から23日までの３日間、陸上自衛隊第１特科団音楽隊のパレードや民航機への招待飛行などのほか、22日には航空自衛隊千歳基地が一般公開され、市内外から多くの人が集まった。翌年の第２回は全国的に航空記念日行事が行われるため遊覧飛行の調整が困難となるなどの理由から、９月７・８日の２日間に繰り上げて開催された。特に千歳基地開放では「新鋭機Ｆ－１０４が（中略）金属音を残してアクロバットを舞い、空の祭典を祝った」（Ｓ38・９・９『千歳民報』）と約１万人の来場者を魅了した。

38年には商工まつりが第８回、航空まつりは第２回を迎える中で、３月に待望の千歳空港ターミナルビルが完成したことを機に、この２つのまつりを統合・拡大し、空港とともに生きる千歳を大きく打ち出すよう「空港まつり」が企画された。翌39年、市、千歳商工会議所、千歳航空協会、千歳観光協会が主催し、８月７日から９日までの３日間にわたる第１回千歳空港まつりが開催された。『広報ちとせ』（Ｓ39・８・１号）に掲載されたプログラムを要約すると次のとおり。

七日　近隣市町村宣伝パレード、空港まつり式典、ミス空港発表会（市役所前広場）、空港音頭発表会（市民会館）、市内パレード・演奏会（千歳中学校グラウンド）、納涼花火大会（千歳高校グラウンド）

八日　大鵬旗争奪駐屯地対抗相撲大会（千歳神社土俵）、全国民謡踊大会（市

内パレード）、キリンビールまつり（市役所前広場）

九日　招待飛行＝全日空、第二航空団（千歳空港、千歳基地）、モデル撮影会（空港ビル）、模型飛行機大会（千歳中学校グラウンド）、仮装大行列（市内パレード）、アサヒビールまつり（市役所前広場）、第二航空団基地開放＝アクロバット飛行、救難演習、各種航空機、装備品の展示会ほか（千歳基地）

七～八日　七夕まつり飾付コンクール、市内選抜野球大会（青葉球場）

七～九日　航空作文・図画展示会（空港ビル内）

八～九日　自動車・オートバイ展示即売会（幸町四丁目グリーンベルト）、空港まつり写真コンテスト（各会場）

7日の式典は小雨のため市役所前広場から市民会館に会場が移された。大正15（1926）年の着陸場造成の際に率先して村民に呼びかけ、空港開設への功績を称える航空功労者として山崎友吉、川合新三郎、谷本亀、細川孫作に米田市長から感謝状が贈られた。ミス空港発表会では市内から応募のあった候補者14人の中から日本航空㈱札幌空港支店勤務の吉岡志津江が初代ミス空港に選ばれたほか準ミス空港2人が選ばれた。また、作詞を募集していた「空港音頭」も発表され、東雲町5丁目在住の諸中昌之の作品に決定した。そのほか航空自衛隊千歳基地の支援により基地が一般開放され、F－86Fブルーインパルスチームのアクロバット飛行など多彩な行事が行われた。

その後、昭和48年の第10回まで毎年8月第1日曜日を中心に千歳空港、市街地、航空自衛隊千歳基地を会場に開催されてきたが、49年は8月1日から6日に全国から5万人のボーイスカウトが集まる第6回日本ジャンボリーが陸上自衛隊東千歳駐屯地に隣接する北海道大演習場東千歳地区で開催されるほか、市内各所の道路の拡幅工事や千歳橋の架け換え工事により、交通の混乱が予想されることなどから中止となり、翌年も主要道路の工事が予定され中止となった。また、騒音問題が注目されていたF－4戦闘機が基地開放で展示されたことについて、政治的軍事色が強いとして市議会で問題とされたこともあり、企画や実施方法を再検討するため開催を当分見送ることとなった。

前開催から10年が経過した57年4月、市内の観光業者などが主催した千歳の観光を考えるシンポジウムなどをきっかけに、空港まつり復活の機運が高まり、同年7月には商店街、商工会議所、観光連盟、航空会社などにより空港まつり推進会議が設立され準備が始まった。復活第1回は、翌58年7月29日から3日間開催された。あいにくの雨となったが、従来からのミス空港コンテストやジャンボ機の遊覧飛行などのほか、カナダから招かれたショーバンドと近隣市町から集まった楽団などが飛行場をステージに共演する「ザ・マーチ・イン・チトセ」や空港シンポジウムなど新たに企画されたイベントとともに盛り上がりをみせた。

その後、平成元（1989）年には新千歳空港と路線を結ぶ米国アラスカ州、韓国の海外組のほか、稚内市から沖縄県那覇市まで国内のミス40人が招待され、ステージでの競演や市内をパレードした。この華やかなミスの競演が以降も祭りのメインとして欠かせないものとなる。

6年からは北海道ビールまつり・イン・ちとせと合同での開催となった。

写真４－13　第１回空港まつりミス空港パレード
（S39.8.7、旧千歳市役所庁舎前）

北海道ビールまつり・イン・ちとせ

市内にはキリンビール㈱千歳工場、サントリー㈱千歳プラント、アサヒビールの清涼飲料生産委託工場、隣接する恵庭市にもサッポロビール北海道工場が操業し、ビールのメッカとして市内外にアピールするイベントとして「ビールまつり」（仮称）が企画され、平成２（１９９０）年５月14日に発起人会が開かれた。発起人会で名称を「北海道ビールまつり・イン・ちとせ」に決定し、空港まつり（８月10～12日）にあわせて８月11日にアーケードのあるニューサンロード商店街を会場に開催された。約１万３０００人が来場し、４大ビールメーカーの生ビールが販売され、２８００㌔以上が飲まれた。ステージイベントのほか大道芸やサンバカーニバルなどのアトラクションが祭りを盛り上げ、この年の日本イベント大賞（主催・㈱インタークロス研究所）のグランプリを受賞した。ライバル関係にある４大ビールメーカーを一堂に会した他に類のない画期的なイベントが評価された。

４年からは開催期間を２日間とし、５回目の開催となる６年には新しい展開を求め、ビールまつりと空港まつりを合同で開催し、会場も青空のもとグリーンベルトお祭り広場に移した。翌７年には会場を市役所の中庭と西口駐車場に変更・拡大し、９年にはビールと空のまつりを融合、実行委員会を一本化し「北海道スカイ＆ビアフェスタちとせ」となった。

さらに18年には財政面や集客効果などから、11年に始まったＹＯＳＡＫＯＩソーランちとせトーナメント祭と統合し「スカイ・ビア＆ＹＯＳＡＫＯＩ祭」となり、開催期間も３日間となった。第１回は７月15日から17日に開催された。

駐屯地・基地一般開放

北千歳駐屯地一般開放　昭和27（１９５２）年12月、保安隊千歳駐屯地が開庁し、翌年５月17日に駐屯地第１回開庁記念式典とともに保安隊千歳特科群キャンプの開庁式がキャンプ営庭で行われた。午前に関係者参列のもとで式典や観閲行進などが実施され、午後には町民約３０００人が参加して運動会、演芸会などのイベントが行われた。

29年８月15日には東千歳駐屯地業務隊が編成され、米軍撤退後の25日、千歳駐屯地が北千歳駐屯地に名称変更するとともに東千歳駐屯地が開庁した。北千歳駐屯地では、その後も開庁記念行事で駐屯地の一般開放が行われ、子どもの戦車体験搭乗や演芸会などのイベントで町民を楽しませた。

平成26（２０１４）年６月28日には第１特科団創隊・北千歳駐屯地開庁62周年記念行事が行われ、90戦車など車両約２００両による観閲行進や戦車の体験搭乗などに市民など約２５００人が来場した。

東千歳駐屯地一般開放　東千歳駐屯地は昭和29年８月25日に開庁し、９月15日に第１特科団本部が札幌から来駐したが、隊員の移動が12月まで続いて冬期間となり、翌30年７月１日の防衛庁法施行記念日を前にした６月25日に開庁記念式が延期された。午前は関係者による祝賀会のほか北部方面総監部音楽隊、３５００人の隊員と３００台の車両による市中行進が行われた。午後には駐屯地内で演芸会、運動会、各種展示会が行われたほか、子どもたちをジープに乗せて遊覧するなど多くの町民が楽しんだ。翌年10月７日の開設２周年記念行事での駐屯地開放では、町内会役員と部隊幹部のソフトボール大会や映画会などに約１万人が来場した。

その後、記念行事と駐屯地開放は国内最大級の規模で続けられた。平成26年５月25日、第７師団創隊59周年・東千歳駐屯地創立60周年記念行事が実施され、90式戦車など車両約４００両と隊員約１３００人による観閲行進や模擬戦闘のほか、戦車試乗や装備展示などに市内外から約１万５０００人が来場した。

航空自衛隊千歳基地一般開放　昭和37年９月22日、航空自衛隊千歳基地はＦ－１０４戦闘機の一般公開を行った。９月20日の「航空日」（現・「空の日」）を記念して催された第１回千歳航空まつりへの支援で実施されたものと思われ、このＦ－１０４は同年４月１日、千歳に初めて配備されたものであった。翌38年９月８日も航空まつりの支援として基地を開放。39年８月には、第１回千歳空港まつりが開催され、その支援とともに基地創立７周年記念行事と位置づけ９日に基地を一般開放した。その後も基地創立周年行事とともに空港まつりのメインプログラムとして基地の開放が行われた。

49年に空港まつりが中止となり、千歳基地開設17周年記念式として単独で基地開放が８月24日に行われ、配備されたばかりのＦ－４戦闘機などの地上展示や編隊飛行が行われた。その後も千歳基地開設記念行事として一般開放がなされ、53年からは「千歳基地航空祭」と名付け、ブルーインパルスの曲技飛行や展示、イベントなどで約10万人が来場する。

工場開放

ものづくりを学ぶ工場見学などの産業観光は、新しい旅行形態（ニューツーリズム）の１つとして近年注目されている。産業観光はものづくりの面白さ、伝統技術の奥深さ、先端技術の驚きなど通常の観光では得られない、知的好奇心を満足させるものである。

千歳における産業観光は、昭和40年代に始まった企業誘致で進出した大手食料品・飲料メーカーによる市民向けの工場開放に始まった。

市内において最初の工場開放、工場見学は、50年に進出したキリンビール㈱千歳工場が、翌51年に開催した「ＫＩＲＩＮフェスティバル」である。当時の工場はキリンレモンとオレンジエードの清涼飲料を生産し、消費者サービスとしての工場開放であった。これと同時にサントリー㈱千歳工場（Ｓ42操業）が「サントリー・ファミリーフェスティバル」と銘打ち、ウイスキーのビン詰め工場の見学開放を行った。

61年にはキッコーマン㈱千歳工場が完成、操業を記念し「工場開放まつり」を開催し、千歳駅から無料バスを運行した。

札幌日清食品㈱（Ｓ53進出）は、平成７（１９９５）年から「ラーメン記念日フェスタ」を開催している。「ラーメン記念日」は日清食品㈱本社（東京）が世界初のインスタントラーメン「チキンラーメン」を発売した８月25日を祝した日である。菓子老舗の㈱もりもと（Ｓ24創業）も、平成21年に創業60周年を記念し、臨空工業団地の第１工場で工場見学や製造体験ができる「工場祭」を８月下旬に開催している。

食料品・飲料製造以外の工場としては、フランスベッド㈱北海道工場（Ｓ42操業）が、平成４年、「工場操業25周年記念感謝祭」で、ベッドだけでなく他の商品も製造していることをアピールするために工場開放を行った。

観光物産（観光連盟推奨品）

千歳は北海道の空の玄関・千歳空港と観光地・支笏湖をかかえ、多くの観光客が訪れるが「千歳を代表する土産品は」と聞かれても即答できないといったことが多かった。このことから観光土産品のＰＲと業者の振興を図るとともに観光客の土産品選びの目安となることを目的に、昭和50（１９７５）年に観光土産の推奨品の選定を始めた。第１回目は８品目の応募があり、千歳観光連盟役員と市民代表として千歳保健所、千歳消費者協会の協力を得て、味、価格、千歳の特産などについて審査を行った。審査の結果、もりもと（千歳原、アスパラのまち、支笏の旅）、十字屋菓子店（チップ最中）、明治屋製菓店（ちとせ空港サブレー、すずらん最中）の菓子６品目と支笏湖畔の大和土産品店（大和彫り忘れな盆）の民芸品、

計７品目の推奨を決定し、千歳観光連盟推奨のラベルを貼って販売した。

その後も毎年、応募のあった土産品の中から千歳観光連盟推奨審査会において推奨品を選定している。認定には新規認定と３年ごとの継続認定があり、平成４（１９９２）年度には29品目、15年度には60品目と推奨品は増え続け、26年度では26社、70品目（加工食品等30、菓子19、飲料・酒10、野菜３、化粧品等３、弁当３、飾り２）が選ばれている。

特典として、認定状の交付、推奨された年度より３年間は観光宣伝物やホームページへの掲載、市内外観光物産展・商談会等への出品、千歳ステーションプラザ内の千歳観光物産サテライト「ミル」での販売が行われる。

中には道内外だけではなく海外で販売されている商品もあり、27年度からは、「ふるさと納税」の返礼品としても使われている。

現在では千歳市の観光ＰＲにおいて大きな役割を担っている。

参考文献

北千歳ＯＢ会『北千歳駐屯地開庁40周年記念誌』１９９２年／航空自衛隊千歳基地『航空自衛隊千歳基地25年史』１９８３年、『航空自衛隊千歳基地50年史』２００８年／第11普通科連隊『第11普通科連隊史－栄光の30年』１９８１年／千歳商工会議所『千歳商工名鑑』１９８５年、『千歳商工会議所50周年記念誌』２０１０年／千歳市『増補千歳市史』１９８３年、『要覧ちとせ』各年／山田健「千歳川の捕魚車の発達に関する若干の考察」『北海道開拓記念館調査報告第31号』１９９２年／『千歳民報』／『北海道新聞』